
魔法少女リリカルなのは 異能者達の伝説

バーダック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 異能者達の伝説

【NNコード】

N5986V

【作者名】 バーダック

【あらすじ】

魔法少女リリカルなのはの世界観にオリキャラとオリジナル設定を加えた二次創作モノです

かなりの駄文ですが読んでいただけすると嬉しく思います

プロローグ（前書き）

生まれ変わりました

プロローグ

とある山奥、この山奥には今はもう誰も住んでいない人々からは忘
れられた神社がたつていた

だが、そんな神社に 一人の少年と一匹の猫が暮らしていた
どういう経歴があったのかは不明だが ただわかるのは彼等には不
思議な力が備わっていた

そして、彼等は 妖怪と呼ばれる者たちを専門に 商売をしていた

少年の名はリンク そして、猫の名は 猫またのユウ

彼等は あるモノを調査して欲しいと 妖怪達から依頼された

何でも 二ヶ月程前に空から謎の光石が幾つも落ちてきたらしい
しかも、その石は、かなり危険なものらしい
リンク達はその依頼を受け 見つけた場合 すぐに封印するた
めに街へとおりた

そして、一人の 少女達と出逢う

第一話 魔法少女とジュエルシード

町に降りたリンク達だが、これといった 情報も得られず今、トボトボとふらついていた
日は落ち辺りはもう完全に暗くなっていた

「…………第一実物を見たことにやいのに、どうやって探すつもりだ
つたんにや？」

「…………勘」

ユウの質問にリンクがそんなことをぼざいたので、ユウは思いっきりリンクの顔面に頭突きをかました

「ブツ！…何すんだ！」
「勘て……お前はあほかにや……」

「何とかなると思つたんだよ！」

「元やるか！」

前向きなのか　ただのアホなのか　とにかくリンクはたまにこうい
う事をする　そのたびに、呆れたユウがリンクにツッコミをかま
し言い争う

最早、二人の間で　お約束みたいになつていた
だが、リンクの勘も捨てたものではなかつた

「…………？」

不意に一人は何かの力を感じた一人は　急いでそこに向かつた

すると、何やら杖のようなものを持った女の子が、黒い怪物と対峙していた 足元にはイタチの様な動物がいる

「…ふえええ？」

いや、女の子の方は後ずさつしているから、対峙しているところよりは困惑している感じだ

すると、怪物は物凄い勢いで女の子に襲いかかった

「… わかるかあ！」

リンクの掌から、青白い光の弾を思いつきり怪物にぶん投げた

「…む！…なに！？」

光弾が 怪物に当たった瞬間、怪物の体は粉々に弾けどび 辺り一帯に突き刺さった

リンク達は、色々と気になつたが今は 無視して女の子に駆け寄つた

「……大丈夫か！？」

「……ふえ？ あなたは？」

「そんなことはどうでもいい！ ペットを連れて早くにげろーーー！」

リンクが 女の子に逃げるよひに促してると

「待つて！！」

不意に一人の足元から声が聞こえてきた

「……ジユエルシーードを封印しないと ヤツは追いつく……」

「……喋ったー？お前 妖怪だったのかー…？」

「「……妖怪って何？」「

女の子とイタチは、首を傾ながら睨みついた

「……今は、そんなことも話は後にすることやー……来るべき…」

二つの間にか 元に戻った怪物が またも襲いかかってきた

「ちーひー…」

「……わー…？」

「……いやあー…？」

リンクは、瞬時にイタチをすぐこあげ、女の子の腰に手を回し、思いつきり後ろに跳んで怪物の 攻撃をかわした

「……くつ 何なんだ あれはー…？」

「……あれば 忌まわしい力によつて生み出されてしまつた思念体です その杖で封印して元の姿に戻さないかぎり倒す事は出来ません」

「……ふえ？杖つてこのレイジングハートのことだよね？……えつと それって…」

「はい、アレを封印するには貴女の力が必要です！」
「ふえええうーーど、どうすれば良いのーー？」

「それは…………！」

イタチがその方法を教えようとした時、怪物が再度二人に襲いかかってきた

「ふしやあああーーーー！」

しかし 赤黒いオーラを纏つたコウが怪物に体当たりし、吹っ飛ばした

「…………すいこ…………あなたたちは一体…………」

「…………どひやひひ、君が言つたことは本当みたいだな 俺達が時間
を稼ぐーー！」

リンクはそういつと、イタチを女の子に預け 怪物の方へと突っ込んでいった

「はーーー?時間を稼ぐつて…………」

「は、早く封印しないとあの人の達が危ないのー
どいすれば良いのか教えてーー！」

「わっ分かったー簡単に説明すると……心をすませて浮かび上がった呪文を唱えるんだ」

「…………心をすませる…………」

女の子は そう言って田を閉じた

「……落ち着いて……その呪文は君だけにしかわからないんだ」

「……私だけの呪文……わかったのー!リリカルマジカルー!ー!」

「封印すべきは恋まわしき器 ジュエルシード」

女の子が、呪文を唱えた瞬間 杖から桃色の鞭のようなものが伸びて、怪物に巻き付いた

「「……ん?、うおー?、あぶねえー...」」

「近くにいた リンク達まで 巻き込みそうになつたのは多分氣のせいだろ?」

「リリカルマジカル シリアルナンバー? ? ? ? 封印

幾つもの 桃色の光が怪物を貫き怪物は消滅した

そして、怪物がいたところには、青白い光の石が転がつていた

「それが、ジュエルシードだよ レイジングハートで触つてみて」

そう言われ女の子が杖で触れると ジュエルシードと呼ばれる石は、杖のなかに吸い込まれた

「……終わりなの?」

「うん、封印完了だ」

「「……ほほうーーそれは良かったな(ニヤ)ーー」「

「……えっと…何だか、二人(?)とも 顔が怖いよ?……」

「「…危うく巻き込まれかけたんだ!お前は 僕達を殺す気か!…」」

「……ふにゃあ 「ふえんふあふあいー(「めんなさこ)」

リンクが女の子の両頬を引っ張り、女の子が、涙目になりながら謝つていると 不意に糸が切れたように イタチが倒れた

「「…大丈夫!?!」」

「…氣を失つただけにゃ それより 「こから早く離れた方が良さそうにゃ」

「……ああ そうだな」

辺りを見ると、地面は抉れ電柱は傾いている

「…もしかして 「こに私たちがいると 非常にこまぢい?」

「……」

「……」

リンクはコウを、女の子はイタチを、それぞれ抱え

「「…逃げるぞ!…」」

「「…めんなさーー!…」」

全力でその場を離れた

第一話 自己紹介（前書き）

新たなオリキャラがでてきます

第一話 自己紹介

リンク達は今、近くの公園に逃げてきていた

「……よし、ここなら大丈夫だろ」

「……はあ……はあ……疲れたの」

女の子の方は かなり息を切らしている

「大丈夫か?… とりあえず、少し休むか」

リンクは、そう言つと公園のベンチへと歩いていった女の子も後に
続き 二人ともベンチに座つた

「…………うーん…………」

「気がついた?」

「……」
「は… そうだ、僕はあのあと氣を失つて……」

「…………大丈夫か?」

「……はい、あなた達のおかげで助かりました 傷も残つた魔力で治
せましたし……」

((…………魔力?))

聞きなれない単語にリンクとユウは首を傾げた

「…………あの、本当に申し訳ありません 皆さんを巻き込んでしまつ

て……

「……やせは 気にしないで 君が無事でよかつたよ」

「……でも、……本物のめんなやー」

「……ねえ、血口紹介しようつか? 私の、名前は高町なのは、皆は なのはって呼ぶの」

「……ユーノ、ユーノ・スクライア あつスクライアは部族名だから 名前はユーノだよ」

「…ユーノ君か 可愛い名前だね……」

やつぱり、なのははコンク達の名前も聞いたと 隣をみた

「……今考えたら 僕達がにやつ大胆な事をしてしまったにや……

「……ど、どうじよつ つつきに僕達と同じかと黙つたけど 何か違つみたいだ」

「…魔力にやんて力、僕は、知らじやんこじや」

「……俺だつて知らなつよ……気になるけど……」

「……迂闊に聞いてしまつたら 僕達の素性も話せいやければいやりにやくじやる……」は適当に相手してやつやと帰るや

「……御意」

が……何やらボソボソと作戦会議をしていた

「…………あのあ…………」

「は、はいー」

「「いや、「いやんだ?」」

「…………えつと…………お名前を教えてほしいの」

「あ、ああ 僕の名はリンク で、こっちがコウだ……一人はなのはちゃんとコーノ君でいいんだな?」

「「ひつうん」

何やら狼狽えまくっている一人に、なのはも若干狼狽してしまつ

「…………それよりも君達は何者なんだ?」

「あつそれは私も、気になつたの、喋る猫さんつて事はコーノ君の仲間なの?」

「……いや、僕は一人できた … それに 君達からは魔力とは違う何かを感じる」

迂闊に聞かなくともコーノとなのはがリンク達の素性を聞いてきた

「「…………せ、禁則事項だ（にや）」」

まだ狼狽えまくっていたリンク達は、何処かで聞いたことのあるセリフをほざいた

「 「」

「と、とにかく教えられない.....せひ、もつ遅いし帰らないと
家族が心配するわ」

リンクは、強引に会話を打ち切り なのはの手をとつて公園の出口
まで歩き始めた

「 もやー...あの...」

「 君の家は何処だ? 送つてこくよ」

「女の方の一人歩きはあぶこやいからこやあ」

いきなり手を引かれた事で驚いたのはだが、聞いても答えてくれ
そうにないことを悟り、これ以上は聞かないこととした
.....「一ノは 聞きたそうにしていたが.....

それから、なのは達を送つリンク達は、自分の住みかへと戻りつと
していた

「ああ 何かじつと疲れた...」

「 ...全くこやあ、もつ終わつたし、あの娘たちとも会つてしま
いやいだらう」
「 ...やうだといいけどな...」

「 どうかしたのか?」

「いや、何かこれで終わりじゃない気がするんだよなあ

「……よせにや 僕達の力が通じない奴がまだいるにゃんて考えた
く」や「いや」

「……まあ 倒すんじゃなくて封印するんだが……あのジュエルシー
ドっての俺達じゃ封印できないのかな?」

「……難しいだらういや……

「…………やうか

と、少し暗い感じでそんなことは話ながら リンクが神社の中に入
るうとする

「コンク~~~~~!~!~

一人の女性が勢いよくリンクに抱きつき…………もとこ突っ込んできた

「へふんっ!~!~!~!

これにはリンクも対応できず、もう溝内にタックルをかまされてしまつ

「…………「アッテルフか?」

「はー……ヒドイですよリンク 」の私を置いていくなんて

テルフと呼ばれた少女は上体を起こし腕を組 顎を膨らませながら
ブンブンと怒っていた

「…………いや、だつて　お前と一緒に行くと立つかり…………」

リンクがこう言つ様に、デルフはかなり立つのだ
年は高校生くらいで……金髪で腰くらいまで伸ばし……碧眼で顔立ちも
整つてゐる……

猫を肩に乗つけて歩いているだけで少し立つといつに　そのつ
え、デルフまで連れていふと立ちまくつてしまふがない

「ええ　別にいいじゃないですか　私達のラブラブのふりを世間に
見せ付けてあげましょひよ」

そして、極めつけはこの性格……堂々と恥ずかしことを言つてしま
ンクを困らせてゐる

「……どう見ても兄弟しか見えこや　こいつ……」

小学生と高校生じゃ何処をどう見ても兄弟にしか見えない

「……ひつか　第一どうに行つてたんですか?」

「…………それを先に聞ひよ…………」

「……まあ、ここです　どうして無事に帰つてきた訳ですから許しま
しよ……」

「ああ　ちよつと女の子とイタチの手助けをしてきた

「…………せつ（ペキペキ）」

「……で、デルフ?　何ゆえ額に青筋を浮かべながら睨むのですか?」

「コンク～ キー～しだけ面をかしてへだせこねえ～

「えつ～あつあれ？ 許してくれるんじや...」...「めんなさこ？」

...何かわからぬいけじめんなさこ？...たゞすへた～

リンクは、デルフに首根っこを掴まれそのまま 住み処へと運び
られていった

「..... やれやれ」や

番外編 影の支配者（前書き）

主人公達 オリキャラしか出ません

次の日

とある山奥にある神社
その庭でリンクとユウが稽古をしていると、神社の中からテルフ
の悲鳴が聞こえてきた

「どうした!?」

慌てて一人はテルフの元に駆け寄った

奴が 奴が でました

「しかし、奴とは誰だ!!?」

.....

……なんだと

ハナニヤ

人類が誕生する前からこの地に生息した

禍々しく黒光りしている体と、ガサガサと音をたてながら高速で動くその姿は、まさに影の支配者に相応しく、見るものに問答無用の嫌悪感を抱かせる

「へへ……Gめーじゅづって何重もの結界を通り抜けてきたー!?」

「……こや、Gにまだんこやセキュリティも、通用してこいや……」

Gの恐るべき特殊能力その一【絶対侵入能力】
Gにはどのよつなセキュリティも通用しない
例えそれが、強力な結界であろうとも……

「……とにかく何とかしてくださこよお……」

余りの恐ろしさに涙を流しながらテルフがリンクにすがり付いた

「……何とかって言われても何処にいるか分かんないし……」

Gの恐るべき特殊能力その二【忍】
一度見失うと見つけるのが困難（ていうか探したくない）しかし、
時折力サカサと音がするのでかなり怖い
「……とりあえず、……探すか……」

「…………じゅづって?」

「……物をばぐればばぐるだらづ」

「だ、誰が?」

「「……」

一度隠れてしまつたGを探すのにはかなりの勇気がいる
何度も、命懸けの戦いを経験してきたリンク達も例外ではない

「…………」

「…………」

「おーーーー！」や にを考へてゐるにやーー嫌だぞ 絶対にーーーー！」

「……でも、猫つて虫を捕りますし……」

Gの恐るべき特殊能力その三 【友情断殺】

の前では、友情も愛情も絆さえ意味をなさない。

「……ええい！…こうにやつたら全妖力を解放して……」

「わあーーー！までまで！そんなことしたら、俺達の住処がーーー！わっわかった！俺が、悪かつたから、落ち着いてくれえーーー！」
……と言つより、この三人がヘタレなだけだつた

そんな、バカ共が、バカな事を言い合いながら、バカ騒ぎしていた
その時……

力サ力サ力サ

「……………（ビックリ）」「……………（ビックリ）」

何処からともなくGのはい回る音が聞こえてきた

「ヤバイ マジ怖い」

「…………ベタレと呼ばれてもいいから、逃げたしたいにゃ」

「…………うううう

リンク達は、ヘタレ全開で三人寄り添いながらそんなことを言い出した（デルフに至っては半泣き状態でリンクにしがみついている）

「…………」のままでは埒があかない……アレを出すしかない

「…………アレとは？」

そつぱうと、リンクは一枚の護符を取り出した

「……俺が、自分の所有物を御札に変えて持ち歩いているのは知ってるだろ？」

その一つを今 解き放つ……『我が力を受けしモノよ 今こそあるべき姿へと、形を変えよ……』

リンクは、護符を人差し指と中指の間に挟み、顔の前に立てるときらびっくびっくと眩い

「……現れよ！－殺虫剤！－！」

リンクがそう叫ぶと 青白い炎が護符を包み込み瞬く間に燃え尽きてしまった

そして、いつの間にかリンクの手には殺虫剤が握られ、リンクはそれを高らかに天にかざした

「ご～ま～だ～れ～？」

「…………まあ、にゃんていうか、能力の無駄遣いにゃ…………」

「…………ていうか、護符にして持ち歩いている意味がわかりませんね……」

そんな、コンクにコウ達は冷やかな視線を送った

「………… わあ……覚悟しきりや……」

視線に堪えられなくなつたのかコンクは逃げるように奥へと歩いていった

「………… はあ……リンクだなじや心もとないや…… おこなルフ、お前は外に出でてこなじや」

コウは やうやく、コンクの元に駆け寄つて行った

「………… ううう 無力でや……」

デルフは悔しそうに外に出でこつた

「………… わいと、まづ何処から探す?」

「………… 適当に物を動かしてたら見つかるやせ」

「………… それが、一番怖いんだが………… 確か、この辺から音が聞こえてきたな………… いた…………」

Gを見つけたのか リンクは、思いつめつ殺虫剤をぶちかました

「おこ……よく見ひしや それせ、ひじりや て おの、ハハハ…… おこなルフ……」

「」

Gの恐るべき特殊能力（？）その四 【疑心暗鬼】
とにかくGを見た後は 黒い物体に過剰に反応（怖れて）してしまつ

「……むう 違つたか」

「……少し落ち着け」「や」

「仕切り直し」

「……ここかな？」

「……！……いたにや……！」

「なに！？……くらえ――――――！」

「なつ！？聞いてにやい！？」

Gの恐るべき特殊能力その五 【究極生命力】
しぶとい…とにかくしぶとい 強力な殺虫剤をぶちかまして死な
ない ぶつ叩いても死なない

「いや、聞いてない訳じゃないんだ！――何度も、当てれば死ぬはず
だ！！」

そう言つて、再度攻撃しようとした
次の瞬間

バサ！ブーン！

「「――――――？」」

いきなり、Gは禍々しい羽を開きもがくように無茶苦茶に飛び出した

予想外のGの行動にリンク達は、光の速さで後ろに跳んだ

Gの恐るべき特殊能力その六 【死なばもひとも】

飛ぶ…奴は飛ぶ…

そして、もがいている姿がマジで キモ怖い…

「…………はあ…………はあ…………はあ…………ヤバイよ…………近づけないよ…………近づきたくない…」

「…………いや、それよりももっとマズイ状況にや…………見る…」

ユウガがやつて 言ひて 頭で会図すると、やひらひら…

「…………バカな…………質量を持つた残像だと…?」

「違つ…………ひづ見ても…………いや…………」

Gの恐るべき特殊能力その七 【究極増殖】

一匹見たら十匹はいると思え

「…………どうしようコウ 僕もう無理だよ…………」

「…………俺も あんにゃ のチートにや…………勝てる訳にや…………」

と、一人がまたヘタレ全開になつた その時、救世主が現れた

長い手足に八本の足

そう、我等が軍曹の登場である

軍曹は、G並の足の速さでGに近付き

ガシッ！バク！！

そのままGの上に乗ると
ハ本の足で、Gを押さえつけ
そして…

۱۱۱۱۱۱۱۱

これには、リンク達もびっくりである

……」ついで、後に「G事件」と語られる「ヒカルの事件」は、我等が軍曹の活躍で幕を閉じた

一方、リンク達は、この事が軽いトラウマとなり

「なのは様あーーー！ どうか、どうか、このベタレめを一晩だけ泊めてくださいーーー。」

「ふええええ！」？

……なのは泣き付いていた……

【トラウマ】Gの恐るべき特殊能力その八

第三話 金髪の魔導姫（前書き）

セコソルぬです

第三話 金髪の魔導師

ある夜 リンク達が対G用兵器を買いに街に降りた時 何かの力を感じた

「…………なんだ？」

「…………この力、あの娘とていてるにゃ」

「…………なのは……じゃないな 誰だ？」

力はなのはに似ていてるが なのはではない
リンク達は、それを感じ取つた
そして、そこから導き出される答えは一つ

「もう一人の魔導師?」

「…………まあ 力を持つものが一人とはかぎらにゃいにゃ…………問題は
敵か 味方かにゃ」

「リンク~~~~~ユウちゃ~~~~~ん」

と、一人が真面目に話してると 後ろで楽しげにリンク達を呼ぶ
声が聞こえてきた

「…………」「…………」「…………」

「あつちで美味しそうなケーキを見つけたんですけど買つて帰りま
しょつよつてどつじたんですか?」

「…………『テルフは感じなかつたのか?』

「…………ああ れつせの魔力ですか?…別に興味あつませんし

「…………お前は相変わらぬ 無関心といつかなんといつか…」

「私としては折角の『トーント』なの『リンク』が他のナビ板をとりれている事が問題です」

「…………トーントで俺もこるが?…」

「あら?私は、口ひけやとも好きよ?可愛いもの」

「…………ペシト感覚かにちやー?…普通はやつが リンクがひつとおかしいのか…」

「やつですね? おかしいところが凄いと書つか…………あら?やついえ?、コンクは?…」

「はい、『テルフ セイセイ』で買ったケーキ 適当に選んで貰つた

「…………やあああ?買つてきてくれたんですか?ありがとうございます?お礼にあなた達が気になつてる魔導師に話を聞いてきてあげます」

慌ててリンクが引き止めようとしたが、デルフはその場から一瞬で消えてしまった

「「……不安だ（「や）（…」」

リンク達がいたすぐ近くのビルの屋上に一つの人影があつた

「…………」に母さんの探している物があるんだ……」

「だけど、どうやって探すんだい？」

「ロストロギアだから近くにあつたら分かると思つ……ね？バルディッシュ」

《はい》

「…………じゃあ まずは寝床を確保しないといけないね 空き部屋に結界でもかけるかい？」

「うん お願いアルフ」

「……あらあら、人の部屋を勝手に借りるなんて関心しませんねえ……てつ人の事言えないか」

「……誰だ！？」

デルフが、現れた

(……二つの間に……全然気がつかなかった)

「あんた なに者だい！」

「……通りすがりの者です ちょっと聞きたい事があつてきました」

「…………なに?」

「あなたの探し物つていうのは何ですか?」

「……アンタには関係ないよー」

「私の、旦那（！？）があるものを探してまして もしかしたら同じものかもしませんよ?」

「…………ある物?」

「ええ ジュエルシードつて二つ石なんですけど……」

「…………！」

『エルフの言葉に 一人は驚きの表情を見せた

（ジュエルシードつて 確か、フェイトが探すように頼まれたロストロギア……なんで二つが……）

「ふむ、一緒みたいですね ……手伝つてあげましょうか? ジュエルシード集め」

「…………え?」

「…………なー?」

「私達にとつては邪魔以外の何物でもないんですね 誰でも良いからとつと回収して欲しいんです」

「それを 信じじろつて言つのかい？」

「ええとつです やうすれば私達の住処にあるジュヌルシードをあげます」

「持つてゐるのー?」

「はー? 一応はつひのダーリン（ー!ー?）が封印に成功したのがあります」

「……何とアントアも魔導師か?」

「少し違こますけど 説明が面倒なんで そつこつとこつこつとこくださー」

「……は、はあ」

「とこう訛で 今から私の愛の巣に案内してあげましょー?」

「……」

（どうすみへフロイト 何かコイツ調子が狂つよ 気味が悪い）

（…………あつ愛の巣／／／）

（…………フロイト?）

（ひやあーなつ何?）

(…………いや、どうするんだい？　マイシの声のことを信じるのかいい？）

（…………嘘をついている風には見えないけど…………でも…………）

と、一人が目で（？）会話をしていると、

「…………やつやつと登れた…………」

主人公が現れた

（……またなんか妙なのが来た！！　何なんだい？の世界は…）

アルフは軽い憂鬱感を覚えた

（……何だらう？　この人　不思議な感じがする…）

フヨイトは、リンクから何かを感じ取った

「「「それよりも　どうやつて登つて来たの（なんだ？）？」」

「…………闇夜に隠れて？？」

「「いや、そういつた事じやなくて…」」

「…………所で、あなたたちは誰だ？」

「「…………遅い」」

リンクの登場にアルフだけじゃなくフヨイトまで少し憂鬱感覚えた

これがリンク達と、フェイト達の初めての出逢いだった
……なんと言つか最悪な出逢いである……

第三話 金髪の魔導師（後書き）

……」感想待つてます

第四話 持つてけジュエルシード

「という訳で ここがおれ達の住みかだ

場所は とある山奥

リンク達の住みか

その後 お互いに自己紹介したのち ジュエルシードを渡すために
フェイト達を説得

で 何とか少し…ほんの少しだけ信用してもらい現在に至る

「…いや 住みかって…あんた達こんなところにすんでんのかい?」

アルフが信じられないといったよつて呟く

「…? 何か問題でも? 見た目はこんなでも中は住みやすくして
るよ…まあ…奴が出ない限りは…ね…」

そういうとリンク達は遠い目をしだした
数日前の壮絶なバトル(?)を思いだしているのだろう
(フェイト こいつらを信用して大丈夫なのかい?)

(…悪い人達じゃないと思つ)

(……フェイトがそうこうしながら…)

フェイト自信 なぜだか分からないがそう思つた

「つと いかんいかん 軽くトリップしていた

不意に正気に戻つたリンクはそういうと 住みかの中に入った

「ちょっと待つてくださいねえ 今 持つて来ますか?」

「…何があつたかはこの際聞かないけど ジュエルシードはまだつかつて手に入れたんだい?」

「拾つた」

「は?」

「ですから 拾つたんですよその辺で デーリングは日夜封印に勤しんでたつて訳です まあ 完全には無理でしたけど… それはまた別のお話です」

セツコ「トリルフは 強引に会話を打ち切つた

「……どうしてこんなところに住んでるの?」

今度は フロイトがデルフに質問した

「…話せば長くなりますが また今度ね」

デルフは曖昧に笑いながらそういった

何だか これ以上は聞けない様子だったのでフロイトも黙つた

「セツコお前らは何者にや こやんのためにジュエルシードを集める?」

「……あんた達には 関係ないよ」

「ウの質問に アルフは素つ氣なく答える

「…ヒヤンヒヤ 聞えこやじほどヤバイ」とヒヤのか?

「はあ? あんた達を信用してないだけだよ」

「ヒヤるほど 簡単に人を信用できいやいほどヤバイ道を歩いてきたって訳か」

「なつ! ?」

「（図星か）…お前達…特にその娘からは見た目からはわからんほどの戦いの匂いがするこ…（リンクと回じヒヤ）」

その娘…フヒイトは多くの戦いを経験してきた ユウはそのことを見抜いていたいや 見抜いていたのはユウだけでなく リンクもアルフも気付いていた事だった

もちろん フヒイト達はそんな話も素振りも一切していなつまり たつた数十分でリンク達は見抜いた事になる

（……なんなんだい こいつは…）

ユウの言葉にアルフは驚愕する

「まあ 興味はにやいが もし俺たちの敵ににやるような事ににやれば容赦にやく潰す」

ユウは静かに しかしあつさつとヒヤつた…殺氣付きで… その殺氣にフヒイト達の背中からは嫌な汗が流れた

（あちやー ユウちゃんの悪いくせがしましたねえ… やつとヤバいですねえ ヒヤの殺氣）

ユウは基本的にリンクや『テルフ以外には心を開かない…なにかしらの敵意を向けてくる相手には特に…

「まつまあまあ とりあえずはフロイトやん達も私達の事を信用してくれたわけだし 仲良くしまじょう」

「こいつは 信用してにゃいといつたぞ 大体信用してにゃいのに よくじこでついてきたにゃ？」

それは『テルフも気にはなつていた…が…多分リンクに調子を狂わされたせいだろ?』とテルフは思つていた

「まあ それはリンクのせいでしょう」

なので リンクのせいにした

「…………」やるせど

ユウも何故か納得した

「つて 勝手に納得してんじゃなこよ…ただあのリンクとかいう奴に調子を狂わされただけさ!」

「アルフ それじゃリンクのせこいつて言つてこよいつなものだよ」

（（やひぱっか！））

アルフの言葉にユウとテルフは心の中ではもつた

「あつたばかりの人を陥落させるとは リンク…恐ろしい子…！」

「デルフは 驚愕しながらそういった

「『めん 待たせたな』

つと その時リンクが戻ってきた

「はい これの中にジュエルシーードが入ってる」

そういってフェイトに 箱を手渡す

「……ホントにいいの？」

「ああ 僕には必要ないからな 持つてけ」

リンクは 笑顔でそういった

「ありがとう」

フェイトはそういって箱を開け 封印に取り掛かつた
「バルディッシュ」

《了解》

フェイトは バルディッシュと呼ばれる斧の様なものをジュエルシードにかざした

「ジュエルシーード…封印」

そして ジュエルシーードはバルティッシュの中に吸い込まれていった

(やはり 高町なのはと一緒か……でも 仲間ではないよつだけど)

一瞬なのはのことを教えようかと思つたが魔導師に異様な警戒を見
せていたためやめた

後にこの事で 少しだけややこしくなるとも知りず

番外編 リンク紹介（前書き）

とりあえずは主人公の紹介です

番外編 リンク紹介

（リンク）

年齢：9歳

利き腕：左

属性：不明

術式：陰陽術

家族：なし

性格：お人好しで仲間思いだが仲間を傷付ける敵には容赦しない…
が、例え敵でもなにかしらの事情があれば見逃す…というか首を突つ込むこともある

例え仲間であろうと間違っていると思えば全力で止めようとする…
これはユウやデルフも一緒であり3人曰く（仲間は協力し支え合うものであり甘やかすものではない）とのこと…鈍感

容姿：主人公の類にもれず整った顔立ちをしている

金髪（トンガリ帽子はかぶつてない）

オカリナを弾く勇者と顔も名前も一緒のような気がするが多分氣のせい

普段は天然氣味でとぼけた感じの三枚目だが、スイッチが入ると別人のようになり雰囲気も変わる

能力：高い靈力を持ちそれを操れる程の身体能力と経験を持つ
剣術、体術にも優れており接近戦が得意…馬術も得意洞察力もすば抜けて高く相手の表情から感情や心境を読むこともできる（但し
万能ではない）

技量、技能ともに高い

天然たらし

女装が似合う

絶対音感（教えられたメロディーを違つ楽器で演奏できる）

風の動きがよめる

望む望まないに関わらずにかしらの力を呼び込む体质（良い事ばかりではない）動物に好かれる

と かなりのチートぶりではあるがこの全ての設定が生かされる事は多分ない（笑）

物語が進むにつれて新たな力に目覚めるかも

大体は 多作品のパロディになると思いますが…申し訳ない
技とかを考えるのが難しい何かありませんかねえ…

番外編 リンク紹介（後書き）

なんか書きたくなった 申し訳ない

第五話 協力（前書き）

今回も 話が進みません すいません

第五話 機力

「フロイト ジュノルシードも手に入つたし早く行け」

「うそ」

「ええ……わざ帰つたやつの? 泊まつてこあんしゃーー 中はなか
なか快適だよ たまにGができるけど……」

「泊まるかー 大体 Gつてなんだい?」

「……G……それなしの世界を裏で支配する 影の支配者
「か……影の支配者? そんな奴がこの世界にこぬなんて聞こてないよ

「ひやがフロイト達はGの存在を知らないことつだ……ひやがもしこ
……」

「フロイト やつぱり早く行けり なんかヤバそうだよ」

「えつでも……」

「コンク やめとせいや Gを知りこや こひやんてどりかここと
「俺たちの奴らにや」

「……あたし達がいこと」俺たちだつてー?」

「違ひのつかないや?」

「当たり前だ! 私達は こやフロイトせりだまでもうと話しこで
たんだ それを……!」

途中まで言つて アルフは我に返つた

「……いや なんでもないよ

「アルフ 私は苦しんでないよ 好きでやつている事だから」

「……お母さんのためですか？」

「「？」

デルフの問いに一人は驚いた
フェイト達の会話をデルフは聞いていた
そして デルフはずつと気になつていた

「……話してくれませんか？もしかしたら 協力できるかも ねつ
コウちゃん」

デルフはコウに何か含みのある言い方をし笑顔を向けた

「どうやら デルフもコウも考えていた事は一緒にみたいだな」

リンクはそうじつてフェイト達のを見た
そして…

「話してくれないか？ジュエルシードを集めの訳を」

「あんた達には関係ないつて言つてるだらつへ 大体私達に協力して
何の得があるつていうんだい」

「ふつ 人生を楽しむコツは損得を考えない事なのさ」
アルフの問いにリンクは前髪をクールに書き分けながら答えた

「まあ 要するにバカなんですよ リンクは」

「…………って 僕はバカじゃない……」

「いー や バカにゃ」

「バカですね」

「…………バカじゃない！ なあ 一人もそう思つだろ」

リンクはフェイト達に助けを求めた……が……

「バカだね あんた」

「えつえつと その……」

アルフははつきり答え フェイトは返答に困り目を逸らした

「なん……だと」

「それがトドメとなり リンクはうなだれた o_o

「本当に おかしな奴だね」

「フフ ダメだよアルフ 失礼だよ」

「… フェイト 今笑ったかい！？」

「え？……そういうアルフこそ」

一人は自分達が笑っていることに気付き驚いた
ここ最近 自然と笑ったことなどなかつたからだ

「……アルフ 私 この人達に話してみる」

「大丈夫……なのかい？」

「うん きっと大丈夫」

そして フェイトは話したジュエルシードを集める訳を……

第五話 協力（後書き）

次回は 巨大化した萌え動物がでます
感想待つてます

話聞 大きなニャンコ（前書き）

番外編みたいな感じです

話聞 大きな「ヤン口

～リンクサイド～

初めまして この物語の主人公……かどうか微妙なリンクです
さて 今俺は人の家に（無断で）入っています

「にしても でかい家だなあ」

そういう家の 恐ろしくでかいし広い そして猫が多い（重要）
さて なぜ俺がここにいるのかといふと……

「//ヤアー？」

ジュノルシードの気配がしたのでお邪魔させてもらいました
しかし これは予想外

「……猫だよな」

「……猫だにゃ」

「……」

田の前には 大きな子猫（？）がいます

「大きな子猫（？）なんて 初めて見たよ」

「言つてる場合かにゃー早く何とかしないことまずこいや」

「ああ セウだな 」のままだと巨大なノグが大量に……」

「うふと待つこ ズとは何に」や 「

「NO MHの事」

ペットを飼っている人は一度は被害にあつ小さき吸血鬼 危険極まりないGに並ぶ害虫

「こやるほど NO MHだからZかに」や 「

「うひ」

「……じやあ 待てよ 猫が巨大化してこるとこつ」とせても……

「……多分」

うわあ 行きたくねえ

し、しかし早くしなければ色々マズい

「よし ュウ 行け!」

「つて 僕かにやー?」

「同じ猫だろ?」

「だから いん時だけ猫扱いするにやー」

おのれ 我儘を!

「大丈夫さ ちゅうと話を聞いておくれるだけでいいから」

「お前しか 大丈夫じゃ いやいいやー。」

「ばれたか…

「//トー？」

ヤベ みつかつた！

「コウ 話してこら暇はない何とか 説得しないこと」

「ちつ しょうがにゃいにゃ」

セツコヒト コウせ子猫(。・。) の元に走つてなにやら話しあじめた

「ヒー ハヤン ヒヤン」

「//ヤー~//ヤン //ヤー~」

やべえ 超可愛い

萌える…

あつ戾つてきた

「なんだつて？」

「原因はジユエルシードで間違ににゃいにゃ ただ厄介なのは あの子猫 かなり嬉しがってるにゃ」

「嬉しがつてる？」

「おつまみへやつたー？ だれうひだ？」

「ぶつ！」

コウの言葉に 勢い良く鼻血が出たが なんとか手で押さえた

「くつ あれはヤバい 早くなんとかしないと…多くの人が萌死んでしまつ」

「いや お前の頭が 一番やばいじゃ」

何を言つて 全世界の猫好きの方々は間違いなく萌死ぬぞ

「とにかく 早くあの子猫を助けなくては そして もちこつともふもふしなくては…」

「…（最後の言葉は無視して）やつだ」やつて とりあえず俺がこもんとか説得してやる ものの その後はお前に任せること

そうこつこつまたコウは子猫（へ）の元に走つて行つた

「さて 暫な俺は結界でもはるか… なんだ？」

誰かが結界を張つた？

しかも この辺りに…

この力は感じたことがない

「まさか 新たな魔導師か？」

まだいるのか？ そう思つた俺は 結界の中心地点へと気配を殺しながら向かつた

話聞 大きなニャンコ（後書き）

次回でなのはとフェイトが出会いします

第六話 なまこじれ（前書き）

シシコミはなしの方向で

第六話 なあにこれ

前回までのあらすじ

主人公不法侵入

大きな子猫（？）を発見

ユウが説得

暇な主人公

そこに謎の結界、魔力反応主人公 スネーク化
とまあ こんな感じ

さて、絶賛スネつてる主人公ではあるが 結界の中心地点にきてビ
ックリ…ではなく 軽くホツとしていた なぜなら 中心地点には
唚然としている栗色の髪の女の子とフュレットがいたからだ…
なのはとユーノである

「…ふむ、まさかとは思つていたが、あの一人か」

新しい魔導師だつたらどうしよう…と考えていた反面少し ワクワ
クしていたリンクは若干残念そうにぼやいた
それから、どうしよう…と悩んでいた

話し掛ける…にしても 今は絶賛不法侵入中…下手すればゴロウさ
れ相手フィールド場に守備表示で特殊召喚してしまつ

「……よし、逃げよつ」

とことことで、なのはに任せこなはは退散することにした
…結論早すぎである

…が、世の悪業をやのまおかる程甘くはない

「コンク…」じんにやといりこたのか 捜したこや…」

つと、タイミングが悪い事にコウがかなり大きな声で怒鳴ってきた

「わあ…コウ…！静かにしてくれ…！」

驚きと焦りのあまり、一番声がでかいといつお約束をかましつつ
たリンク
当然…

「誰かいるの…？」

「…、なのはたちに見つかってしまつ

「…………コウの所為で見つかってしまったじゃないか」

「いや、お前の所為にや」

「のやり取りもお約束である

リンクはしぶしぶ茂みの中から出でこつた

「…………えへつと 久しぶりだね 高町さん？」

「コウリンクくん…？それにコウくんも… 何やつてんの…？」

「…………ジユノルシードのを感じて來たんだ」

「えつでも、いじあずかちゃんのお家…」

「わあー。わざとジュエルシードを回収しちゃー。」ベガ高町なのは…。コーン・スクライア…。」

なのはの言葉を強引に打ち切り、リンクは早足に子猫（？）の元に歩いていった

「「あつはこ…。」

「…………」

「あつかしたにゃ」

リンクの言葉に思わず返事をし、なのは達もリンクの後に続いた

そんなリンク達を見ながらコウカはため息をつきながら呆れていた

ところの訳で、やっと本題に移れる訳だが

「…………本当にあの子猫（？）は大丈夫なんだな？」

「うん 封印するのはジュエルシードだけだから 子猫（？）には害はないはずだよ」

「ふむ、ならばよしー子猫（？）には可哀想だが……元に戻つても

「おひ

「…………後でなぐさめてやるかこや」

「じゃあ いくよー。レイジングハートー。」

つと、なのはが封印しようとしたその時

なにかしらの危険を察知した子猫（？）が、いきなり突っ込んできた

「のわああ！一突っ込んできたあ！一なのは一急いで封印を！」

「ダメにや！…間に合わにやい！…」

卷之三

封印が間に合わない事を悟ったリンクは底うようになのはたちの前にでた

リンク君！？

「リンク！？」

「リンク！！つち
仕方にやい！！」

ユウガ リンクを守るため子猫（？）に攻撃しようとした その時
だつた 何処からともなく飛んできた雷が子猫（？）に直撃し子猫
(?) は勢い良く倒れた

そして、一人の少女が木の枝に勢い良く着地（木？）した

「……大丈夫！？リンク！ユウ！
……フェイト？」

先ほどの雷は フォイトのものらしい
どうやら

「……フロイト」

リンクは フロイトの名を呼びながら フロイトのいる木に飛び移り……そして

「うひーー！ ヤン！」をいじめるなー。」

そうこうでフロイトは木に登った

「あひーー？」

まさかの攻撃に ディを抑えて涙田になるフロイト、ついでに 頭には？マークが飛び交っている
まあ 助けたのに怒られたら誰だつてそうなるだろ？そんなリンクに……

「！」のばかーー。」

一匹の狼が怒鳴りながらタックルしてきた

「！」ふーー。」

もろに食らったリンクはぶつ飛び別の木に激突、そのまま地面にダ
イブした

「まったく フロイトはあんたを助けたつてのに 何考えてんだい
ーー。」

狼はブンブン怒りながら リンクを睨んだ

「……アルフ やつすぎたよ」

「何をいってるんだよフロイト まだ 足りないぐらうれ」

「…………フロイト…………アルフ…………な…何で」「」

「ジユエルシードの反応があつたからに決まってんだろ それより
あいつらはどうじつとどだい?」

そういうて アルフは、なのはを見た

「あいつら 魔導師だろ? 一緒にいるつてことは 仲間か?」

「まあ 初対面ではないな」

「ふーん」

アルフはかなり 疑つた目でリンクを睨んだ

「…………もしかしなくとも、俺の事疑つてる?」

「当然!」

アルフ即答

フロイトもどうこう事だと感じてリンクを見てくる
正直かなり怖い 特にフロイトが……

「ああ まあ なんていつか そのあ……」

「コンクくん? その子は誰なの?」

リンクが どう説明するか悩んでいたとき、なのはがそう聞いてきた

「とにかくジュエルシードが先だ！」

何か下手なことを言えばヤバそつだったので早急に逃げる事にした
リンク……
「タレである

だが、そつは問屋がおひたない
どちらがジュエルシードを封印するかとこつ問題に直面してしまつ
ついでに「まかしほどきない……」
敵意を向け、話を聞く氣はない
そうなれば、当然激突は免れない

「ヤバこよ…… ノウ… びひつよひ」

「「ひん」」
「お前はどつちの味方「いや？」
「たにせ」

「…… くわ」

「といひで お前はどつちの味方「いや？」

ピクッ

ユウの何氣ない一言になのはとフュイトが反応したが恐怖のあまり
距離をとっていたリンク達は気付いていない

「いや、味方も何もフュイト達とは約束してないなあ…… でも 目
的は一緒なんだし 高町さんたちにも協力を頼んで……」

そうじつた所でリンクはギヨツとした なぜなら ものすごい黒い
オーラを纏つたなのはが 一歩からを睨んでいたからだ

「…………た、高野さん？ 一体なぜ そのようなじつ黒いオーラを纏つてこるのでしょうか？」

「ふむ リンクも罪な奴にやがれ」

「一体このままにはとのフラグがたつたのか（おれらが事件後）リンクにかつてないピンチが訪れようとしていた…………ジユノルシードは？」

第六話 なあにこれ（後書き）

次回 カオス

第七話 何か色々カオス（前書き）

ツツコミはなしの方向で、

第七話 何か色々力オス

～リンクサイド～

「……………どうしてこうなった
こせマジでそう言いたい ありのまま今起じつてこるじとを語る
と 高町さんとフロイトが戦つてます
ジュエルシードをめぐって……

「……ジュエルシードは渡さない！」

「△○！」

……フェイト強いな
高町さんを完全におしてると

あの後、高町さんの隙をついてフェイトが奇襲

これがいよいよなつた訳で

「あらじては助かったのだろうか」後で色々と聞かれそううだ

「いいのかにや 手助けしないで」

……コウ 簡単に言つなよ

「リンク！なのはを助けてあけないと！」

二二二
トーノまで

「いや、俺は何もしない」

……できないし……

「なつー?」

「ん?」

俺の言葉に ユーノが驚き ユウが首を傾げる

「勝つたほうがジユエルシードを封印する だから ユーノ 邪魔するなよ」

それが 一番手っ取り早い フュイトには 田的もあるしな
まあ 命の危険がきたら止めるが……

それに 今のフュイトは高町さんの話を聞いたりなどしないだろう
何か 魔導師をかなり警戒してると

「さて 僕は今のうちに子猫(?)からジユエルシードを引き離す
か」

「できるのか?」

「がんばる」

ジユエルシードの封印はかなり危なかつたが出来た 後は、こんな自体でもジユエルシードを封印できれば言つ」とはない

「ユーノは 高町さんを見てるよ 多分負けるから」

「なつー?」

俺の言葉にコーカはまた驚き そして俺を睨んできた……ふむ、嫌われてしまつたようだ

それにもしても、驚くことかね 高町さんとフェイトでは実力の差は明白だ それもわからんとは……やはり一度敗北を味わつた方がいいな 高町さんもコーカも……

「ずいぶん冷たい態度にや どうしたにや？」

「ただ協力してるだけじゃダメだと思つてね」

いろんな意味でね……

つと、話していくうちに二人の戦いも決着がつきそうだ お互に 対峙してゐる

「むつ……」

ヤベ 子猫（？）が田を覚ました
つて おい 相手から田を離すなよ

子猫（？）が起きた事で一瞬フェイトから田を離した高町さん その隙をフェイトが見逃すはずもなく

バチバチ……ドローン

フェイトの持つバルディッシュ…だけ? から雷が飛び高町さん に直撃した

「なのは……」

ぶつ飛んだのはをユーノが追いかけ 魔力のクッシュョン（？）を作り受け止める …… 大丈夫そうだな それにしても 便利だな魔法つて

「うひー

田が覚めた子猫は 何が何やらわからなこと言つた具合に辺りをキヨロキヨロしてくる…… 可愛い

「遅かったにゃ」

「ああ そうだな」

氣を失つている隙に封印したかったが 無理だつたか 田が覚めた以上 僕の力じゃ封印できない

「所で 一つ氣ににやる」とがあるんだが……」

「ん？」

「あの子猫（？）の首筋の黒い物体はにゃんにゃん？」

黒い物体？…… はて 確かに あれは一体……

「………… なあ ユウ 何か嫌な予感がするんだが」

「………… 僕もにゃ」

お互い黒い物体に対していい思い出がない俺たちは互いに顔を見合させた

「うひゃーー！」

カリカリカリカリ

つと その時 いきなり子猫（？）が鳴いたかと思つと 首筋を搔き出した

…………そして 跳り飛ばされる黒い物体

子猫（？）の近くに落下する黒い物体

子猫（？）の近くにいる俺達
ご対面？

巨大化した猫 首筋の黒い物体 搔き毬る

つまり…………ペットを飼っている人にはつざわ120%のアイツ

NO MI

今、巨大吸血虫との人類の命運をかけた戦いが始まろうとしていた
(笑)

第七話 何か色々カオス（後書き）

次回からカオスです ツツコミは

第八話 虫なんて大嫌いだ 前編（前書き）

戦闘つて難しい

第八話 虫なんて大嫌いだ 前編

～リンクサイド～

俺は今どうするべきか迷っていた ていうかどうすりゃいいんだよ
この状況

とうええず ゴーのに聞きたい事があるけど 離れてるし
ていうか 微動だにしないんだがあの虫野郎

「……………どうするにや あいつ動かにやいぞ」

「どうするって言われても ……」

正直 戦いたくない ていうか怖い

「……………じんじゃ」とやら あの娘を助けておけば良かつたにや

「……………そういえば フェイトはどうした?」

周つを見渡してもフェイトとアルフの姿はない

「……………バルディッシュ モード電撃」

《了解》

…………と思つたら………… フェイトなんにきなりですか

フェイトは 虫野郎に向かつて電撃を放つが…………

「つー？ 速い！」

虫野郎は凄まじい跳躍力でそれを躱す
そのあとは 予想通りというかなんといつか ピヨンピヨンとその
場を飛び回りフロイトのさらなる追撃を躱しまくっていた

「なんなんだい！？ あいつの速さは、化け物か！」

アルフもかなり驚愕している

「…………当たらなければどうとこう事はないって奴か……」

「言つてる場合かー！ 早くこやんとかしこやいとヤバいぞー！」

「ああ 動き出した以上は倒すしかない！」

俺は懐から一枚の札を出し それに靈力を込める

「我が力を受けし物よ 敵を切り裂く刃となれ 現れろ！ モクの

剣」

そして 靈唱を唱えると札は青白い炎に包まれ一本の剣が出現した
小さな剣で 刃の部分以外は木で出来ているためかなり軽く子供の
俺でも問題なく扱える

「よし いべぞ モク！」

「おー！」

「…… フロイト あこつらも戦う気だよ

「えー？」

「アルフの言葉にフロイトはかなり驚いている
「いやー何だその反応は われ達が戦うのがそんなに以外か！？」

「リンクー！オレが奴を牽制する 隙を見つけてぶつた切れにやー！」

「いや 僕が奴の注意を引き付けるから ノウが攻撃しろー！」

「何を言つてゐるにやー！お前の剣は飾りか！」やー「お前が斬れー！」

「ノウ！」やー その爪や牙は飾りか！ お前がやれー！」

「！」やんのために剣を出したん！」やー「おもこつくり やつてこり
「！」やー

「これはもじしものときのためだ！ ノウ！」やー 最近妖力使つてない
から詫つてゐるだろー！」

「いや 別に」

「いやー タまには力を使つた方がいいって」

「お前 そんにやーひとつてあの虫野郎にびびつてただけだらー！」

「なな何をいいつてるんだかわからんない
それは ノウなんじやないのか？」

「！」やー「まあさか あんにやー奴にびびつてただけだらー！」

……正直に言うとかなり怖い 何だよ 巨大なノミツテビツの戦えつていうんだよ！

「…………何をやつてんだい あいつらは ……はあ少しは 戦えるかと思つたけど全然使えないねえ」

「…………リンク達は戦わなくとも 私一人で大丈夫だよ
…………い、いかん 何か アルフが残念なものを見る目でこっちを見てる

フェイトの方は 何かホツとしてるよつなつてフェイトさん バルディッシュから光の刃を出しちゃって
まさか 接近戦を仕掛けるつもりじゃ……

「はああああ……」

ぎゃあああーそのままかでしたー！

鎌のような形をしたバルディッシュを構え フェイトは凄まじい速さで虫野郎に斬り掛かつた

「つー？」

だが 虫野郎はそれを躊し ピヨンピヨンと そこいら中を飛び回る

……くそー動きが読めない

「くつーダメだよフェイト 動きを止められないー！」

「くつー！」

更に 追撃を仕掛けんも当たらぬ

仕方がない

「……………ユウ いつなつたら腹を括るしかないよつだぞ」

「……………やるしかにやいか…」

「アルフ…」

「！？ なつなんだい！？」

「おれ達が敵の動きを止めるから ジュエルシードを封印し…」

「なつなにいつてんだい あんた達に止められるわけ……………」

おれ達はアルフの返事を待たずして虫野郎に突っ込んでいった

「フユイテ…」

「コンク…？ ユウ…？」

「加勢する…」

そうこうつて俺は思い切り地面を蹴り 虫野郎との距離を一気に詰め
剣を横風ぎに払つた……………だが やはり 奴には避けられてしまつ

「ふん…甘いにゃ…」

しかし 虫野郎の着地地点に向かつて ユウが口から妖力の塊を放つ
いや この場合吐くと言つた方がいいのか？

「ぐだりんじとを 考えてにゅいで 集中しろ…」

人の心を読むなつと言いたいところだが、確かに集中した方がよさ

そうだ

ユウの妖力は 確かに命中した
だが……

「……無傷……か」

第八話 虫なんて大嫌いだ 前編（後書き）

いつになつたら終わるのかそれは 作者も分からぬ

第九話 虫なんて大嫌いだ 後編（前書き）

ノミとの戦いは、終わりです

第九話 虫なんて大嫌いだ 後編

「リンクサイド」

「……無傷か……」

ユウの攻撃は確かに敵に命中した しかし、あの虫野郎には傷一つついていない ユウの攻撃が弱かつたわけじゃない それは、ユウと何度も戦つたことがある俺がよく知っているとなれば……

「……あの速さで、あの耐久力か 手強いな」

本気でやらないとまずいかもな……

「リンクサイドアウト」

「ユウサイド」

無傷とはにじや、少し驚いたでもまあ リンクも真面目にやる気にしてやつたし大丈夫かにや れど、虫野郎 今度は本気でいく 覚悟しろにじや……

「ユウサイドアウト」

「……リンク？ ユウ？」

フェイトは一人の雰囲気が急にかわったことに少し戸惑っていた 今の一人は真剣な表情をしており とてもさつき迄と同じ人物とは

思えない

普段、ふざけてる（よつに見える）分なおさら意外だった

「フエイトー」

「ー なつなー?」

「さつきの雷撃で 敵を牽制出来るか?」

「え? う、うんって牽制ー?」

「ああ 当てる必要はない とりあえず 相手の注意を引き付けて
欲しい」

「一体 何をする気なんだい?」

「別に ただ 隙を見つけてぶつたエーーだけだ」

「エーーって かなり速いよ?」

「やうやく フエイトでさえ追いきれなかつた敵を倒せるのかい?」

「倒すー!」

リンクのその即答がふりにフエイトとアルフは驚き困惑した

（やつぱり 普段のリンクと違つ）

（一体なんなんだい 普段は全然違つじやないか）

「……どうかした?」

「う、ううう 何でもないよ……バルトイッシュショウ…」

《了解 モード雷撃》

「ふ、ふん お手並み拝見とこいひじやないか

「よし、えじや 鞍制よひじく」

「ちゅーどこに行くんだいー!?.」

「ちゅーと 準備にね すぐ戻る それまで適当に暴れてて

そうこうと リンクは林の中へと消えていった

「なつなんだい あいつはー!..」

「ま、何か考えがあるんだり お前達は、お前達の仕事をしりこむ

そうこうと ユウは木の枝を飛び移りながら、敵との距離を詰めようとした…がユウが近付くと虫野郎は敵と認識したのか すぐさま距離を離した

「ふむ、だつたら これにやー!..」

ユウは先ほどの妖力の塊を虫野郎に放つた
しかし やはり虫野郎はこれを避けた

〔虫の言葉〕

「ふうん いわっぺ風情が我をとりえられるものがー!..」

だが…今回の攻撃は一味違つた 虫野郎が跳んだとこがけて無数の雷撃が放たれたのだ

「今度は逃がさない…」

「俺の攻撃は因こ も 覚悟しろ も 虫野郎…」

いくら速いとこも空中では無防備 加えてこの数の攻撃 誰もが直撃する事を確信した しかし…

「甘いわ…こわっぱ共…！」

なんど、虫ではあり得ないぐらこ 巧みに体をひねり、無数の雷撃を全て避けてしまつた

「んこや…あいつ ホントに虫かこ も…？」

「く…もつ 一度」

フロイトは 再度虫野郎に向かつて攻撃しようとするが…

〔えひえ 今度はこのひの番だな〕

着地と同時にいきなり虫野郎がコウに向かつて突っ込んできた

「……!？」

不意をつかれたコウだが何とかこれを躱す

「むうん…！」

しかし 空中で一回転して 木を足場がわりにし そして また
第一の突撃を仕掛けてきた

「お前本当に虫かにゃ！？」

「虫ではない！神だ！……」

自称神である虫野郎のタックルを食らってやになつたその時 いき
なりコウの周りに蒼白い光の壁が出てきて自称神の虫を弾き飛ばした

「ふぬあああ！……」

自称神の虫はそのまま木に叩きつけられる そして 今度は 蒼白
い札が無数に出現したかと思つとそこから黒い鎖が飛び出し自称神
の虫に絡まり完全に動きを封じた

「ふう かかつたか」

「リンク！？」

「これあんたがやつたのかい！？」

「ああ 名付けて『呪縛陣』 無数の『呪縛符』を周りに設置して
敵を一斉に捕える 術式に時間が掛かるから本来は罠として使うん
だがな」

「じゅばくふ？」

「なつなんだいそれ？」

「あの鎖が出てる札の事だ 単体でも使える」

リンクはそういうと空氣中に『縛』といつ文字を書いた すると文字の周りを蒼白い光が囲みまるで一枚の札のようになつた

「これを操つて相手につけるても動きを封じれるんだが あんな風に鎖を出すことも出来る」

「何だか変わった力だね 魔法とは違つみたいだし」

「確かに バインドに似てるけど違つみたいだね」

「まあ 魔法じゃなくて靈術だからね つてそんなことよつ速く封印しないと」

「あつうん そうだね」

フロイトはそういうと自称神の虫野郎の所に行つた

「ふつこの勝負我の負けだが 貴様等の驚きあわてる顔が見られて満足だ」

「封印」

～リンクサイド～

あの後、虫野郎と子猫に取り憑いていたジュエルシードを封印した

その後、高町なのはの容体が気になつたがユーノが友達を呼んできたのでひとまず安心して 急いでその場を離れた 不法侵入 いうか入ん家だつてこと忘れてた

とにかく ジュエルシードも手に入れたし めでたしめでたしかな

「そういうえば、リンク あの女の子と親しそうだっただけど どういう関係なのかな かな？」

「フフ、フヒイトさん 田が怖いよ？」

「そういうえば、フヒイトがあんたの事を助けてやつたのに あんた フヒイトに何をしたつけねえ？」

「ア、アルフさん そんな指をならさなくとも……って フヒイトも バルディッシュを構えるのをやめて！」

「……説明してくれるかな かな？」

「さて 説明してもらおうかい？」

「一夜を共にしたなかにゃ なつリンク」

「確かに泊めてもらつたけどさあ

「一緒に寝たる？」

「いや あれは怖い話をコウがするから……って フヒイトさん？ なぜ バルディッシュを鎌状に？……ちよつと待つて！ストップ！ 死ぬから！ それ 命を刈り取る形だから……コウ！ ヘルペスミー……！」

「ヘルペリー！」「やべー！」

「エーハヤでもここから 助けて……。」

「わあ 楽しい 鬼ノリの始まりや」

「あえええ 絶対画刃がしつねだらあ……。覚えてるやつの野郎……。」

「コンク戦には、まだこれからや」

「やかましこわあ……。」

第九話 虫なんて大嫌いだ 後編（後書き）

次回は お泊りです

第十話 旅行！？

時刻は、夕方

「…………リンク その手に持つて居るものはないやんにゃ」

「ノミ」とリストプレーだけ?」

.....

.....」

シュバツ！ ガシツ！

「何処に行こうといふのかね？ ュウ」

「話せこや！貴様、俺をどうするつもりだよ！？」

「どうもしない
スプレーをかけるだけだ
全てはお前のために」

「本音は？」

復讐 お前とノミで

「やつぱりか！」

「当たり前だ！俺の受けた恐怖を貴様にも味あわせてやる！」

「だから 何度も謝つたにや！」

「許さん！」

「許せ！」

「…………貴方たちは一体何をしてるんですか？」

俺とユウガギャアギャアとわめいていたとき、いつの間にか、呆れた様子でデルフが立っていた

「おお デルフ 久しぶり

「デルフ 懐かしいにゃ」

本当に久しぶりだ 最後に会ったのは何時だっけ？

…………あれ？数時間前だっけ

「…………殺意がわいたわ」

あれ？ちょっと デルフさん どうして そんなにビズ黒いオーラを纏つて近付いて来るんですか？

ちょっと！腕は！腕はそっちに曲がりませんよ…………

「今度 そのネタを使つたら許しませんからね？私だって 気にしているんですから」「出番がないのが？」

「腕一本じゃ足らないみたいですね」

「「すいません」」

俺とユウは デコを床に擦り付けながら 深々と頭を下げた て
いうか土下座した

「相変わらず バカみたいな事をしてるね あんた達は
「みんな 仲良しだね」

「げえ アルフ！ フェイト！」

声がしたので 顔を上げて見ると、そこにいた人々が俺の事を散々
追い掛け回した方々が立っていた

「げえってなんだい！ 人を化物みたいに！」

「化物じやにやくて 化け犬だけじにや」

俺の反応に怒るアルフに 更に 追い打ちをかけるユウ

「あたしゃ 狼だよ ここの化け猫！」

「何だとー？」

「なにわー。」

互いに睨み合つ

何か 仲悪いなこの一人

「はいはい 暖暉はそこまで」

互いに睨み合う「一人を『テルフ』がたしなめる
ナイス テルフ

「所で何か用か?」

二人の事は『テルフ』に任せて俺は フェイトに話し掛け

「え? あ、うん……えっと リンクに 謝りたくて」

「謝る? ああ もしかして 曜でのこと?」

フェイトとアルフが狂戦士の魂を召醒めさせ 俺をフルボッコにした事か

「別に 謝らなくていいよ ていうか 高町ちゃんの事を話さなかつた俺が悪いんだし 『ごめんね』

俺は そういうとフェイトに頭を下げた

「ううん 私の方こそ『ごめんなさい』

そういうと フェイトも俺に頭を下げた

「まあ その お互い許したって事で」

「……うん」

俺が 顔を上げてそういうと フェイトも顔を上げた

「……あの子もジュエルシードを集めてるの?..」

「ああ 危険な物だからな

「……そつなんだ」

フェイトは そういうつて真剣な表情になる
……まずいな

「なあ 高町ちゃんと協力しinるつてのはどうだ?」

「えつー!?」

俺の提案にフェイトは かなり驚いた

「そんなに 驚く事か? 案外俺たちみみたいに協力してくれるかもし
れないぞ?」

「…多分 言つても分かつてもうえないとと思つ」

むう ダメか やはりデルフの様にはいかないか
一体どうやって フェイト達と仲良くなつたんだか
その能力分けてほしいよ

はあ まあ お互い 命を奪う事はないと想つし 僕は俺の仕事を
するか

「そついえば デルフ お前今までどいにいたんだ?」

「ええ ちょっと お買物に

「ふーん つておい!」

「何ですか?」

「何ですか？じゃない なに堂々とサボり発言してんだお前は」

「いや～ ジュエルシードの気配はしたんですけど リンク達もいるみたいだし 大丈夫かなって」

「大丈夫な訳あるか！俺たちがどれだけ 苦労したと……」

「それに 福引きで温泉旅行が当たったんですよ？」

「なに！？でかしたぞ デルフ」

「……おこ」

つと いかんいかん 危つく誤魔化されるとひるんだ
「フェイアちゃん達もいきますよね？」

「え？私達はジュエルシードを集めなくちゃいけないから……」

「じゃあ 明後日までに準備して貰え」

何が、じゃあなのかわからん

「つて 無視するんじゃなによー」

勝手に話を進めるデルフにアルフが怒る
「でもいいけど デルフとアルフって一文字しか違わないね

「ふんー。」

そんな事を考えていると いきなりアルフに殴られた

「あいたあ 何をする！？」

「何か ムカついただけさ」

何その理由 ていうか理由か？

「フロイトちゃん 明日 私と一緒にお買物にいきましょ！」

「でも 私はジユエルシードを……」

「はいはい たまには 息抜き息抜き？」

「あきらめんこいや 娘 いつにやつたアルフは誰にも止められこいや
いこいや

「うう」

フロイト かなり困っているな

「まあ ジュエルシードの反応があれば すぐに向えぱいこいやな
いか なあ デルフ」

「ええ？ 任せてください」

デルフは連れていくべき満々だし いじめフロイトに折れてもいいっし
かない

「私は賛成だね」

「アルフ！？」

「フュイトは ずっと頑張ってきたんだ 少しうらこ休んでも覗は当たらないさ」「…………でも…………」

「フュイトちゃんは 私達と行くのはイヤ?」

なおも 考え込むフュイトに ついに デルフが最終手段にでた
瞳をウルウルさせながら フュイトに迫る
つといつても かなり芝居がかかっているが……

「そつそんな事ない!……でも……」

「私達のことが嫌いなんですね?」

今度は 口元を手で覆いその場で崩れるデルフ
これには 流石のフュイトも折れるしかなかつた
デルフ 恐ろしい子!!

小説つて難しい

番外編 迷走（作者が）

旅行に行くことに決まった次の日
デルフ フロイト アルフ達女性陣は、新しい服やら下着を買った
ためにデパートに 野郎二人は、家で大人しく留守番……

「よし 来い！ ユウ」

「おう……」

など するはずもなく、留守番そっちのけで修行に励んでいた

「へりえ……」

「何のあ……」

ユウは、リンクに妖力の弾を放つが リンクはそれを避ける

「今度は、こっちの番だあ」

「ふん あたらにやければどうということはにやーーー！」

今度は、リンクが靈弾を放つが ユウはこれを回避 そんな事を二
時間以上もやつて いる 留守番そっちのけで……

ちなみに 今 リンク達は 神社よりも更に山奥にいる そこで
半径1キロ程に結界をはりそこで実戦形式の修行をしている

「ふう～ 少し休むか」

「やうだにや…… で、これからのおは？」

「…………特にないな」

女性陣の買い物に付き合へば 間違いなく荷物持ちをさせられる
そして 必ず待たされる そう思つて留守番する事にしたリンクだ
が、家にいても特にする事はない

時間つぶしに模擬戦を事をしていたが ずっとといつのはきつい
時間つぶしに模擬戦を事をしていたが ずっとといつのはきつい
「しようがない 適当にぶらつぶらへか もしかしたら 何か依頼があ
るかもしないし…………」

「……やるほど そして 金をふんだくるつもつかにや？」

「するか！ そんな事……！」

リンクは今 妖怪限定の探偵みたいな事をしている 評判はなか
なか……なのだが最近は 依頼が少ないので少し困っている

「よし じゃあ 行くか」

そういうつて リンクとコウは 依頼探しの旅に出掛けた 地獄が待
つているとも知らずに…………

〔デパート内 服屋〕

「うーん これも可愛いです こつちも似合って……うーん

「デルフ 私のは本当にいいから…………」

「何を言つてゐるんですか フェイトちゃんはもうひとおしゃれするべきです 」
「なにも可愛いんですから 勿体ないですよ」

「でも こんな高い物……」

「大丈夫大丈夫? 気にしないでください? 可愛い子には可愛い服を
買つてあげるのが世の理 ウフフ 何だか萌えてきた… もとい 燃
えてきた」

「デルフ~ フェイト~ 早くしておくれよ~ わたしゃもう 腹
へつて死にそうだよ~」

「はいはい もうちょっと 待つてくださいねえ すぐ終わります
から……あつ~! これも 似合います!……」

「う~ デルフ~」

「…ふふ」

「とある山奥」

「……なあ ユウ 一つ聞いていいか?」

「…………いやんこや?」

「…………」

「…………」

依頼探しの旅に出たリンク達だったが……ものの数分で迷つてしまつた

「いやいや おかしいって 地元で迷つなんて 有り得ないって」

「たしかににゃ」

リンク達がこの山の神社に住み着いてから一年はたつてある その間 何度もこの山を駆け回つたが 一度も迷う事などなかつた

「つと ことわ まづつた?」

「ああ どうやら妖怪の縄張りに入つてしまつたらしくにゃ かにやり強力にや …」

妖怪は 他の妖怪や人間に住みかを荒らされないよう自分達の縄張りに常に結界を張つてゐる

結界にも様々な種類があるが 山奥など景色があまり変わらない場所には 人を迷わす結界が主に使われる といつても 悪戯目的や人間を逃げられなくするためにも使われるが …

「この辺りに 妖怪の住みかあつたか?」

「にゃい まつ妖怪は基本 自由人だからこや」

「……それでも 全くわからなかつたな」

「確かに」

リンク達ならば 並の結界などすぐに察知できる
察知できなかつたということは それだけ強力だという事

「…………強いかな？」

「強いにや 下手をしたら俺たちより強いかも…………
助けて〜！デルえも〜ん！！」

〔デパート マク ナルド〕

ピクッ

「ハツ（…………）！！リン太君が呼んでいる」

「リン太？誰だい？それ」

「呼んでいるって 何も聞こえなかつたけど…………」

「…………じゃあ 気のせいですね（ていうか 何でリン太君何て
訳の分からないことを言つたんでしょう？私）」

〔とある山奥 結界内〕

（ふふ 焦つておりますねえさて お次は何をしましょう ウフ
フ 見事 生き残つて 私を見付けてくださいね 旦那様」

リンク達から離れた所で この結界をはつた張本人と思わしき人物
が 謎の鏡に映るリンク達を恍惚とした表情で見つめていた

ゾクウツ

「どうしたにゃ リンク」

「いっいや 何か鳥肌が……」

今 リンク達の見に危険が迫っていることにリンク達は まだ 気
付いていない……

番外編　迷走（作者が）（後書き）

ご感想　ご指摘　ご不満
どんどん書いてください　励みになります
それから　「感想を書いてくださった方　本当にありがとうございます」とい

番外編一 暴走（前書き）

新しいオリキヤラを登場させてしまった 申し訳ないです

番外編一 暴走

二年前

私は 今 全身傷だらけの状態で追つ手から逃げていた 奴等は >
払い屋 <

陰陽師の末裔で 妖怪を刈るのを目的とした裏の人間達

「はあ、はあ、……それにしても人間というのはいつの時代も変
わりませんねえ」

いつの世も人間は 妖怪を恐れ、悪と決め付けている愚かな生き物だ
人の噂、伝承に躍らされるだけで 本質を見ようとしてない

「はあ～ どうしましょ～～」

樹の影に隠れて これからどう逃げようか考えていたその時 払い
屋が放つた矢が まるで蛇のように樹の間を縫いながら 私に迫つ
て来た

「つーーー？」

私は咄嗟に 横に跳んだが完全に避け切れず 矢は私の足に突き刺
さつた

「ぐつーーー！」

私は 憄まじい激痛にその場に倒れこみ 動けなくなつた

「やつと大人しくなつたか 妖怪め

払い屋は冷たい眼で私を見下ろす

……ああ まだ またこの眼だ 何処までも冷たく 冷淡で 冷
酷で そして 何処までも弱々しい眼

「……もう抵抗しないのか? しなければ 殺すぞ

払い屋の低い声が 聞こえる

……ええ もういいです もう逃げるのにも 疲まれるのにも疲
れました

考えてみれば 私は十分生きました 悔いはありません

「ふん つまらん 呆氣ない幕切れだった」

払い屋は そういうと鞄から刀を抜き 大きく振りかぶつた
……恐れなんてない……悔いなんてない……なのに……なぜ……こん
なに胸が苦しいのだろう
……なぜ 涙が溢れてくるのだろう

……私は 本当は

……そして 払い屋は刀を振り下ろそうとした時 私は 静かに目
を閉じた

ガキーンッ！――！――！

しかし、その瞬間 金属同士がぶつかり合つ音が聞こえ 私は思わ
ず口を開けてしまった

「…………何をしてるの?」

そこには 恐ろしい程に 冷たい殺氣を放つ 一人の子供が 私を

底づよつに間に立ち 扱い屋の刀を 小刀な剣で受け止めていた……

〔とある山奥 結界内〕

ハツ（…………）…… いけません 少し寝てしまつていたよつです
…………それにしても

「おー ュウ キノ口を見付けたぞ 食べたら大きくなるかな?」

「いや それ 違うキノ口にや」

「おー……あんな所に ノ口ギリクワガタが!」

「季節外れすぎだろ…… つて 何を呑気に構えているにや……」

「な、何だよ 急に大きな声だして……」

「俺たちは 今 結界内に閉じ込められてるんだぞ!/? 一刻も
早く 術者を見付けるかしないと 一生迷子にや!/?」

猫ちゃん 良い事言つた!/? そうです 早く 見付けてください
旦那様?

「あつ! 今度は カブト虫発見?」

「聞けやあ!/?」

「ぶぐらあ!/?」

猫ちゃんの頭突き炸裂

うわあ 痛そり……

「つ痛う~ 何すんだ!!」

「人の話を聞け」この脳みそプリン男が!!

「何だと!! この駄猫があ!!」

「にやつ!! 言ったなあ!! 今日とこつ 今日は許さん!! 地獄

を見せてやるにや!!!!」

「上等だあ!! 返り討ちにしてやる!!!!」

…………あの一人は何をしているのでしょうか?

もしかして 状況が読めてない? バカ?…………ええい この

ままでは 埼があきません こいつなつたら…………

私は 自分の指を噛み 一枚の葉っぱに血を垂らす
すると あ~ら 不思議 葉っぱが 一人の美女に大変身~?
パチパチパチパチ?

「それでは 葉ちゃん お願いしますね~?」

「…………はい」

「どんな手を使つても構いませんので 遠慮なくやつちやつとくだ
さい?」

「…………わかりました」

ウフフ セレ ピリするか 楽しみですね～？

「「はあ、はあ、はあ、」」

「なつなあ 一時休戦といかないか？」

「そつそつだにゅ」

おつ いいタイミングで 喧嘩が終わりましたね
わあ 今の内です やつちやつてください

「…………もし、そこの御方」

そつそつ そつやつて自然な感じで近付いて……

「…………私と一緒に子作りに励みませんか？」

そつそつ その調子…………って 違う！ 何を いきなり？発言し
てんだ あの駄葉っぱは……

ああ 一人が一瞬で 遠くに…………って 何をしてるんですか……！
早く 追いなさい……！

「…………了解」

全く 大体から旦那様の子供を産むのはこの私です キヤツ？
（。 。 ） 私つたら ?発言？

「おいい 何あれ？ 何なの！？ 何かやばい感じなんだけど……！」

「とにかく走れ…… 捕まつたら大事にや 何かを失うにゅ……！」

「…………待ってください…………今は無しです…………本当
は…………」

「「本当は?」」

「…………私とともに幸せな家庭を作りましょ!」

ヒューン!!

うわあ 速ーー 人間って本気になるとあそこまで早く走れるんで
すねえ…………ってだから 違うって 言ってるでしょう ふざ
けてないで 早くあの二人を襲いなさい

「…………わかりました」

ふう やつと 分かりましたか 全く 旦那様との幸せな家庭を作
るのはこの私です 結婚式はやつぱり和風が良いですね 新婚旅
行は京都なんてどうでしょう それからそれから 初夜はやつぱ
り畳に敷かれた布団の上で 動物みたいに後ろから…………ああ、旦那
様 今夜は寝かないなんて 私!私!! 壊れちゃいます!!!!
はあ、はあ、はあ!! (、 、)
ん 少し トんでいました

さて、どうなったかな?……おお 葉ツちゃん やればできるじや
ないですか 旦那様のマウントをとるなんて
何でしょう 嫌な予感が……

「…………大人しくして下さい…………奪えません」

「何が!?」

「…………貞操^{ボソック}」

「リンク！…急いで 離れるこ…じゃにゃいと お前の人生が決
まりてしまひにゃ…」

「なつ何だか分からぬいけビヤバそつだ……」Rの…離せ…」

「くつ 何で力にや 引き剥がせにゃ…」

まあ セリでしょ なんたつて 私が作つたんですから力もそれ
なりに……………ていうか あいつボソッと貞操を奪うとか言こませ
んでした？気のせいですか？気のせいならば良いのですが…………

〔デパート内 紳士の社交場（下着売場）〕

ピキー（=ユータイプ音）

「どりどりしたんだい？」ナルフ フュイト

「…………リンクの（貞操の）ピンチです！…急いで向かわなこと…
！ 行きますよ フュイトちゃん」

「うん…」う…デルフ アルフ…」

「はつ？何を言つてんだい！…ちよつと フュイト デルフ…！ 戻
つて…」

番外編三 爆走

「とある山奥 結界内」

「…………ジタバタしないで下さい 脱がせません」

「やめろよ 離せえ！！！」

俺は今 謎の女性にマウントをとられ しかもなぜか 服を脱がされそうになっていた

「ええい リンクを離せ！！」

隣でコウが叫び 何度も女性に体当たりしているがびくともしない
こ、こいつ 痛みを感じていなか?

「ちつ しょうがにゃい リンク！！少し我慢しちゃう……」

コウはそういうと 俺たちから少し距離をとり 全身に妖力を纏わせゐ……って ちょっと待て！！

「コウ！ 何をする気だ！？」

「ここつを ぶつ飛ばすにゃ……」

「待て待て！！ いくら何でもその妖力は出し過ぎだ！！ 怪我したらビリする……」

そんなん放つたら 俺もこの人もただではすまない 確かにこの人は怪しいけど俺を殺しに来た訳じゃない事はわかる

……じゃあ 何しに来たつて聞かれると、わかんないけど……

「…………ナ一をしきました」

「いや 意味分かんないから……あと 人の心を読むな……」
そんな事を話している間にコウの妖力が どんどん膨れ上がつてゐ
!!

「…………!? 許容範囲外の妖力」

「…………にきて初めて コウの方に顔を向ける女性………… 今だ!!
俺は 右手の人差し指に靈力を集中し左手の甲に『衝』という文字
を書き 女性の腹に掌を押し付けた

「言の葉 瞬間 ぶつ飛べ!! 轟衝破!!!!」

俺が技名を叫ぶと手の甲の『衝』の文字が蒼白く輝き女性は叫んだ
とおりぶつ飛び 木に激突した………… イカン………… やりすぎた…………

「…………リンク」

のわつ!!コウがドン引きしてゐ

俺は急いで立ち上がると 女性の元に駆け寄つた

「だ、大丈夫ですか!? すいません つい…………」

「…………」

安否を確認するも 女性はピクリとも動かなければ、返事もない

「…………返事がにゃい ただの屍のようだ…………」

「いつの我慢してたの」

「とにかく 早く手当しなこと……」

「私の必要は」

「ゴウ! ? 何をいつてるんだ! ?」

「コンク お前も氣付いてる筈」

「そんな事は分かつてる でも 」

「そのまま死なれちゃ 後味悪過ぎだわ」

「………… やれやれ」

「え? ?」

「ゴウはいつて 首で女性の倒れている場所を見るよつて

「つー? 消えた! ?」

すると やこには女性の姿は無く 赤黒い血のよつなものが付いた
葉っぱ一枚あるだけだった

「………… 何これ 怖い」

「幻術か それとも式神のよつ? やく呪術か………… びりびり か
いやりの力を持つた妖怪にや……」

「ウガ珍しく真剣な顔になつてゐるといつ事は、本当に強い奴なんだ
わ！」…………普段ふざけてる奴分、真剣になると説得力がありますな……
「…………お前にだけは ふざけてるにゃんて言われたくにやかつたに
や…………」

そういつて 真剣に落ち込むユウ……失敬な！！ それだと 僕が
毎回ふざけてるみたいじゃなイカ…………つて だから 人の心を
読むな！！怖いから！！

「…………つで どうするにゃ 捜すか？」

「…………いや、やめといひ 叶へりから出た方がいいかも…………」

さつきの人だつてビッククリさせたり 嫌がらせしたりするだけで
全然攻撃してこなかつた もしかしたら あれは 警告だったのか
もしれない
妖怪も 繩張りに入つたからといって すぐに攻撃するわけじゃない
何らかの 警告をするもの達もいる

「適当に歩いてたら 出口まで戻してくれるかもよ」

「だと いこけどにゃ」

俺は やつきの女性…と思わしき葉つぱに手を合わせ少々く「「」め
んなさい」と謝り 女性が出てきた場所とは 逆方向に歩きだした

「？？？サイド

はあ～ 失敗です

やつぱり 式神なんて人間が考えた術式を使うもんじゃありませんねえ

まさか あんなぞインランなものが出て来るなんて はあ～ 一
体誰に似たんでしょう……

取り敢えずこの子は回収してつと

それにもしても……

ウフフ 流石は私の旦那様 何という シビれる攻撃
それに 一瞬見せた鋭いお顔 はあ～ (*、 *) ウツトリです
……でも まだですね あの時の旦那様はあんなものじゃなかつた
ウフフ 覚悟して下さい 私がかならず あの時の旦那様を呼び覚
まして差し上げます ウフフ ウフフフ…
ゾクッ！！！

「どうしたにゃ リンク」

「いや……何でもない……ちょっと 急いでるが……」

「??？」

〔とある山奥 神社〕

「いましたか！？」

「ううん いらっしゃいな～よ～」

「くつ～！大人しく留守番するわけ無いと思つていましたけど… 一
体何処に…」

「私 空から捜してみる」

「ええ お願いね フェイントちゃん」

「うん！」

「……………せつと……………追に付いた……………」

「して

「ええ！？ちょっと待つとくれよ 私は一人の荷物を持つてここ迄走つてきたんだよ！？あんた達はお金払う途中で急に走つていつちまうし、あんたの下着は妙なもんばっかりだし、しかも急に走つていつちまうから店の奴等の注目あびるし、流石の私もかなり恥ずかしかったんだからな！！」

「むむーー。JUTちの方角に私のリン×コウ探知機が反応します！」

「つて 無視すんじやないよ…… 行つちまつた
フェイトも何考えてるんだい…… はあ 昔のフェイトに戻つてほし
よ…… 本当に……」

そういうふたアルフからは形容し難い程の哀愁が漂っていたのは言うまでもなかつた

リンク達を結界に閉じ込めた謎の妖怪 何者なのか…？そして その目的とは…？ デルフ達は 無事リンク達を見付けだす事が出来るのか…？

次回 ゼル……もとい 異能者の伝説『正体』お楽しみに

はい すいません 一回やつてみたかっただけです 調子に
乗つてごめんなさい 再生5000 PV4000 読んでくれる
方達がいる こんなに 嬉しい事はありません 本当にありがとうございます（）

これからも 読んでくれると嬉しいです

目標は 一万越え 頑張るぞー！！！

それから 話が脱線しまくつててすいません

何か 収集がつかないと言いますか…………ノリでオリキャラを登場させるものじゃないなと 反省しております

…………もうこのまま オリジナルストーリーを突っ走つて良いですか？ダメですか？

……まだ終わりません

「とある山奥 結界内」

「俺とコウは 結界の出口を探すために ひたすら山の中を歩いていた
「……それにしても 山つてこいつのは何処まで行つても木ばっかり
だな……」

「……当たり前にや」

俺の言葉に コウは呆れながらうつむいた
ずっと歩き詰めで 疲れているせいかシッコウが少し弱い

「……少し休むか 疲れた」

「……そうだにゃ」

俺は適当な所に座り木にもたれかかった
コウも 俺の隣に箱座りする

「さて これからどうするにゃ? まだ 出口を探すのか?」

「……やっぱり 術者を見つけるしかないのかな
あんまり 気は進まないけど……」

「……」
「探しでも出口は見つからにゃい……結界を解く仮面もこ
やい……やるしかにゃいにゃ」

確かに 相手の意図は読めないが どうやら結界から出しつづけ
ないらしい 出口が見つからない以上 術者の方を見つけるしか

ない

「それとも きついが力ずくで結界を壊すか？」

「……結構大変だと思うよ」

結界を壊すには 少なくとも術者と同等かそれ以上の力がいる
俺達に気付かれずに結界内に閉じ込めた所を見ると 妖術も優れて
いる

この結界を壊すとなると かなりの重労働だろう

「……しようがない 術者を捜して結界を解いてもらおう」

「ふむ 久しぶりの狩りにや…腕がにやる」

「ついでコウは不気味に笑う
……つて ちょっと待て

「あくまでも話に行くんだからな O HANASHIに行くんじゃ
ないからな」

「わかつてゐにや…でも 敵だった場合 容赦しにやいにや」

い、いかん ユウから何か どす黒いオーラがでてる

「で、でも どうやつて捜す？」

「その辺に 妖弾を撃ちまくつて炎り出すにや」

「ダメに決まつてるだろ！…」

全く 何を物騒な事を言つてるんだ コウは……

「むつ こもりびつゆめや？出て来て下せこ、とでも呼び掛け
のか？」

「……呼び掛け？」

「それだ！！」

「……は？」

「なるほど 呼び掛けかあ それは 考え付かなかつた ナイス
アイディアだ ユウ！！」

「（・・・）」

あれ？何かユウの皿が点になつてゐるが何でだ？

「…………〔冗談で言つたんだが まさか 本気にするとは…………」

今度は 呆れたように俺を見るユウ

「何だよ 俺の顔に何かついてるか？」

「…………バカの神様が憑いてるにや」

「…………ケンカ売つてゐるのか ここの野郎」

いきなり失礼過ぎだろ

「はあ よくかんがえろにや 呼び掛けで出て来るこや いら苦労はし
にやいにや」

「やつてみなきや分からぬだろ？もしかしたら
素直に出て来て
くれるかもしれないぞ？」

「…………お前の體は二つからいられないで」 ぬぐたべたやつたんが
「？」

……ちよつとムカ（、へ、）

「… そんなに詰つなら見てみよ 俺が上手く説得してやるから」

「……無理だと黙つたが」「せめて

バ、バ力にしてえ！！

スウーツ

大きく息を吸つてえ

「術者に告ぐ　術者に告ぐ　今すぐに結界を解除して我々を解放し
ろ　聞こえるかこの結界の術者よ　聞こえたら返事をしろ」

返事なし
あれえ？

「…………やつぱりダメにや」

ま、まだ
まだ終わらんよー」

俺はもう一度息を吸つて

「聞こえるか術者よ」したな」とをして恥ずかしことは思わないの

かー? 故郷のお母さんも泣いてるわー! こんな妖怪に育てた覚えはないってな!!」

「いや、お母さんどうか 術者の顔も知らにゃいだら お前

「…………結界を解いてくれるのなら ここにいるコウを君に献上
しよう! どうだ?」

「いやに しれっと俺を生け贋に捧げよつとこりやー もう

「…………俺だつてひりー! でも 助かるためにはいりあるしかないん
だ…………くつ…………」

「いやにが…………だ!! このバッタ男…… おこ 術者……」
のバカをやるから 俺だけ逃がせ!!!!」

「あつーてめつ 友達を売る気か……」の 人でなし!!!!
「お前が言つにやーー 」の腐れ外道!!!!」

睨み合つ今にも 一触即発な俺達
すると セーヒ……

「旦那様をくれるところのは本當ですか!? ()」
そういうながら、一人のバカ……もとい 女性が草むら現れた

「…………」

つて 誰!? も、もしかして

「…………もしかして、この結界を張った人?」

「はー（^ - ^）やこの猫ちゃんが逃がしてくれたら旦那様をくれると呪いので 出て来ました」

「なつ！ そ、そんな… それじゃあ つまり…」

「……俺の説得よりコウの説得の方が良かつたって事か？…」

「…氣にするどこのかにやー（^ - ^）のシッコリ満載にや 状況は放置かにやー（^ - ^）」

はつー！い、いかん 余りの超展開に混乱してしまった…冷静に…
…深呼吸… よし…！

「もう一度聞くけど、ホントーにこの結界を張った犯人なんだね？」

「はー 犯人です（^ - ^）…………えつ？…………犯人？」「よし ユウ！… ひつとりえりお…！…！」

「了解にやー」

「えつー？ ちよつ？！ 話がちが… キヤアアアアアー！…！」

「「「 旦那様 ひどいです あんまりです」

俺の呪縛符の鎖に縛られながら、しきしきと泣きながら俺達を非難した

「…………今更 言いつのまにやんだが、話をするんじゃにやかつた

のか？」

「うん……そのつもりだったんだけど……あの笑顔を見ると何かイハツとして……つぶ……」

ホント 何で「こんな」とを……

「……………そうですか 旦那様はこいつらのが「」趣味だったんですね?
もつ それならそうと言つてくださいれば良いのに……私も……旦那様にならナニをされても……キャツ（ ）」

「なるほど……原因がわかつた
この人の雰囲気 ビビとなくテルフに似てる

「……………リンク 」こいつは向とこいやく危険な匂いがするこや……今すぐ」始末しよつ……」

「ま、までコウ イラツのあるのはわかるけど落ち着いて」

先ずは話を聞かないと……始末するのはその後でもいいわる……

「では、これよつ尋問…………もとこ む話を始める
OHANASHIエジやないよ……

「まづ 貴方は何者ですか？」

「貴方の妻です（ ）」

「なるほど、なまものか……」

「こや、生ハリマサ……」

「まともに答える気な（）いだろーー。」「…

「まともに聞く気あるんですか！？」

「私は 大真面目ですよーー。」

「ほほう だつたらその田那様つてのは 誰の事だ？「

「えつ？憶えてないんですか？」

女性は、潤んだ瞳でじらりを見上げてきた……な、何だ その意味
深なセリフは……

「…………リンク また何かやらかしたのか？」

「またつて何だよー その言い方だと いつも俺が何かしてゐた
いじやないか！」「

全く 失礼な！…俺は産まれてこの方 人に迷惑をかけるような事
なんて……

「…………あんな事までしておいて………… あんまりです

女性はそういうと またしきしきと泣きだした……えつ？えつ？
な、何？何されたの？

「…………リンク 責任これにや

ちよ、ちよつとゴウ！… 何だ その汚物を見るよつたな田はー？
何もしてないからな！？ 本当だよーー！

■ ■ ■

「」の期に及んでもまだシラをきぬとは
見損にやつたにや…リンク

リンクカイドウト

ユウサイド

まさか、あんなに号泣するとば、少しあり過ぎた

.....

「……………今まで そんにや臭い演技してんにや 本性現せ クソ 狐……………」

「……………」
フフ……………ばれちゃいましたあ

そういうで女は妖しく微笑んだ

何て殺氣だ

「臭い演技って言うなら、貴方もじやないですか？何ですか
口調？猫又のそんな喋り方聞いた事ありませんよ？」 その

「せつだううせんが考へたからせん」

俺がリンクに仲間として、家族として、迎え入れてもらつた日 あ
いつは猫だからといつ理由で語尾にこやつと付ける事を提案した
今 思い出しても笑えてくる

「……………」 さうですか あの人ガ……………」

俺の言葉に女の表情が変わる…………… やはり、こいつの狙いは

「 答えろ こいやせリンクを狙う? お前の田のは何にや?」
「 …… それもお見通しですか 田のはあの人を私の田那様にする事
です () 」

「……………」

「何故つて変な事を聞きますね 好きだからですよ」

「…………… 結界内に閉じ込め、変にや式神で襲わせたのは?」

「 結界内に閉じ込めたのは 愛の追い駆けっこをするため、あの式
神は田那様を昔の田那様に戻すためです……………まあ どれも失敗しま
したけどねえ」

「なんだ? 愛の追い駆けっこ……………まあいや 考えるだ
け無駄だ……………それよりも 気になるのは……………

「昔のリンクとはどうつて 意味にや?」

「そのままの意味ですよ……………存知無いんですか? そうですね 今か
ら一年くらこ……………」

「つ……」

「ドオウツ……！」

女のその言葉を聞いた瞬間俺は口から妖力の塊を女に放った
だが……

「……危ないですねえ」

「ちつ……」

紙一重で躲しやがったか……リンクの呪縛符をいつも簡単に抜け出す
とは、思つた通り只者じゃないな……
「……いきなり何するんですか？」

「……悪いにや　俺は昔のリンクより今のリンクの方が気に入つて
るにや」

昔のリンクは親兄弟もおらず孤児院暮らしだったが、不思議な力を
持つあいつを理解してやる奴なんて一人もいなかつた

暗く、笑顔もなく、絶望したあいつの顔を見るのは二度とじめんだ
「……貴方たちと出会つて旦那様は変わつてしましました　とて
も穏やかになり、かつての冷たい表情を一切見せなくなつてしまい
ました……」

「それの何が悪いにや」

「悪くはないんですけど……やつぱり　私としては昔の方が良かつた

なあつて」

「……そつか、諦めひこや あいつが世に居る事はもうない」

「いいえ 簡単な方法が一つあります……貴方を殺せば良いんですよ」

「なるほど それは名案だ……が

「俺を簡単に殺せると想つなよ クソ狐……」

「……それはこちらのセツフですよ?教えてあげます 猫又」とき
じや 私には勝てないことを……」

女の頭から狐の耳がはえ、背中から、一尾の尻尾が出てきた

「金色の尻尾!…まさか……」

「はい(< - >) 名は玉藻御前 白面金毛九尾の狐でござこま
す」

「日本三大妖怪の一角か 生きていたのか……」

「ええ 封印されてただけですから……そのせいで力が随分弱ま
りこの時代の払い屋」ときに負けそうになりましたけど……」

「こやるほど その時にリンクに助けられたわけか……」

「はい あの時の旦那様は それはもう凜々しく冷たく格好よく、
その場にいた払い屋達をバツタバツタと薙ぎ倒し……はあ 今思
い出してもウツトリです (*、・*)」

あの野郎 払い屋と戦つた何て聞いてないぞ

……それにしても、厄介な奴に目を付けられたな……

「ウフフ 今更逃げようとしても無駄ですからね この辺りに遮断
結界を張らせて頂きました この結界は外から干渉されることはあ
りませんし、結界を解かないかぎり出る事も出来ません」

「はいはい 説明どうも 要はバリアーみたいなもんだろ?」

「そういう事です じゃあ始めますか 哀れな子猫ちゃん」

「一尾の狐」ときが舐めるな!—

「ゴウサイドアウト」

「急に呪縛符が解かれた感じがしたから 戻つて来たけど
だ?この結界は……」

バチツ!—

「痛つ!—? お、俺がいない間に何が起つてんだ!—?」

「とある山奥 結界外」

ピクッ

「!」の氣は……ゴウちゃん!—? 誰かと戦つてゐる……相手は
……誰?知らない奴

「デルフ 空から探したけどリンク達見付からないよ。」

「……山を降りたんじゃないのかい？」

「……こえ どうせやり 少し焦り過ぎてこたよつです……」

「えつ～どうじつ～？」

「…………」

「あつ～おこデルフ 何なんだい あの落ち着き様は～えつを返とは偉い違いじやないか」

「……こ アルフ デルフのあの様子 きつとリンク達の居場所がわかつたんだよ」

「……私は何も感じないけどねえ」

「とある山奥 遮断結界内」

～ゴウサイド～

さて、そんなこんなで今 僕は九尾の狐と戦つてゐるわけだが……

「……なかなかやりますね 子猫ちゃん」

「……まあな」

流石は 腐つても九尾の狐（今は一尾だが）力が落ちていっても充分強い

「…」これは私も少しだけ本氣でいかせてもらいますね

狐の妖力がさらに上昇した！？

「……それでは、燃やし尽くしてあげましょう」

狐が不気味に微笑んだ瞬間 狐の周りに火の玉が現れた……数は五個か……

「…ウフフ これだけではありませんよ……『炎帝・狐火！…』」

狐がそう叫ぶと狐の周りの火の玉が形を変え、狐の様な姿になつた
……ああ なるほど だから狐火か……
つて そんな事 言つてる場合じゃない

「さあ 狐火ちゃん達 狹いはある子猫ちゃんです 焼き尽くして
あげて下さい」

狐が俺の方を指差すと狐火達はまるで本物の狐の様に襲い掛かつて
きた

……おいおい マジか……
「ちつ……」

急いで後ろに飛び まずは先頭にいる狐火に妖弾を放つ

ボワツ！！

……直撃……しても形が一瞬 崩れるだけでまた元に戻る

なるほど 」の程度じゃ消えないか……

「……おつとー。」

少し思案していたら 別の狐火が正面から襲つてきたので それを躊躇す

「むう 的が小さいと当てにくいですね」

ほつとけ！ 悪かつたな 小さくて！ ！

「それなら じづです！ ！」

今度は狐火、三匹同時に襲い掛かつてきた

「それを見つけていた！ ！」

俺は首を左に捻り瞬間に妖力を解放 そのまま口から光線状の妖力を放ち 思い切り首を横廻ぎに右に捻り、三匹の狐火達に妖力を浴びせた

シユバツ！ ！ ！

妖力を受けた衝撃で三匹の狐火は消滅した

……残るは一匹……いや、本体もあわせて三匹か……

「……やりますね」

「つーーー？」

不意に背後からあの狐の声がした

い、いつの間にか後ろに！？

「……私 気配を消すのも得意なんですよ」

ガツー！

慌てて後ろを振り返るつとしたが、後ろから押さえ付けられる

「ぐつ……このつ……」

俺は完全に妖力を解放しようとしたが……

「……いいですね……貴方には仲間がいて……私にはそんな人はいない……ずっと一人ぼっち……」

「……な……に……」

背後から聞こえてくる狐の消え入りそうなほど小さな声に一瞬だが抵抗を緩めてしまった

ボウツー！

その瞬間 左右から残る一匹の狐火が俺にむかってきた

……くそつ 逃げられない……

ドウツー！

凄まじい爆発による衝撃と熱さ、そして全身を貫く激しい痛みと浮遊感……俺は吹っ飛ばされたのか……それにしても敵の言葉に動搖するなんて俺もまだ……まだ……にや（ユウサイドアウト）

（玉藻御前サイド）

私は田の前で燃え盛る炎 そして今まさにその炎の中に落ちて
いく一匹の猫を見ていた……
胸がとても痛い……苦しい……なぜ？こんな感情なんて……もつ
私には……無いはずなのに……

「…………」めんなさい 猫又さん…………

私は思わず目の前の猫又に謝った

猫又は、炎の中に落下し 姿が見えなくなつた……もうじき
地面に叩きつけられる……そうなつたら妖怪だとしても生きてはい
ないだろ？……いや、仮に生きていたとしてもあの炎の中では……
私がそう思つていたその時……

ダツ――！

いきなり私の横を何かが横切り……

ブワツ――！

その直後に後ろから突風が吹き荒れた

「つ――？ な、なにが！？」

その突風は炎にまで及び 瞬く間に炎を吹き消した
まさか……今の……ま、

私はギヨシとしながら、煙が立ちこめる場所を凝視した
そこには……

「……ふう……間に合つたあ

猫を抱き抱え、安堵の表情をした少年がたつていた

「玉藻御前サイドアウト」

〔とある山奥 結界前〕

「…………」

「…………」

「テルフ 何があるの？」

「まあ 見ていてください」

「つて 何で剣なんかだしてんだい？ ていつかどつからだした！」

？

「じゃあ いきますよー」

「無視か！！」

「アルフ シツ！だよ

「フヒイト」

「ふつ……」

ズバツ！！

「つー? 何だい! ? ここの裂け目は? !

「結界！？」
でも何も感じなかつたよ！？

「それだけ術者が優秀なんでしょう さあ 行きますよ 急がない
と…………！」

「どうしたの？ デルフ」

ユウちゃんの妖気が消えた やられた

えりー!? セウがいたくて……」

「どうした事だいー?」

……次でようやく終わります、多分

番外編五 決着？（前書き）

……ようやく番外編終わりです

番外編五 決着？

「とある山奥 遮断結界内」

「…………コウ しつかりしろ コウー。」

「…………うるさい…………少し静かにじりり…………」

「良かった 生きてたかあ」

「当たり前にや…………俺がそう簡単に死ぬか…………」

「うん、知ってる」

「でも、少し疲れた」「…………」

「ああ 後は俺に任せてゆっくり休め」

「…………リンク あいつは…………」

「んっ？」

「…………一 や 何でもござい…………前の好方に様子が…………」

「…………」

リンクはコウを優しく寝かすと周囲に結界をかけた

「えひつと…………何かさつきと雰囲気が違つた…………あ、耳と尻尾
があるからか………… 狐？」

「…………はい、名は玉藻の前 白面金毛九尾の狐でござります」

「…………九尾の狐…………やつぱり身に覚えが無いな…………」

「…………今は力が弱まっているため一尾の狐…………貴方に助けられたのもその時です」

「…………狐…………もしかして払い屋とかいうのに追われてた狐は…………」

「はい 私です」

リンクが憶えていた事で玉藻は柔かな微笑みを見せる

「…………その君が何でこんなことを?…………人間に対する復讐か?」

「…………はい そうです」

「…………本当に?」

「はい、私は昔 隕陽師に住みかを終われ、何千という人間の放つた矢によって、殺されかけました……」

「…………九尾の話は知つてるよ…………その後 君は自身を封印し その時の妖力でその場にいた人間を殺した……確かに殺生石……だつたかな」

「…………人間とは脆弱な生き物ですね……自分とは違う力を持つたものを恐れ、蔑み、殺す……そして自分を正当化する……実際に愚かです」

「…………そういう奴らだけじゃないよ」

「…………貴方は人間がお好きですか？」

「んつ？ 嫌い」

玉藻の間に即答するリンク

「…………でも、人は好きかな」

「…………意味がわかりません」

「俺が好きなのは 優しくてあつたかい心だよ、それは人間、妖怪
関係なく持つてる……俺はそれが好きだ」

リンクはそういつて、純粹な笑顔を見せた
その笑顔は歳相応の無邪気な笑顔だった

「…………そうですか…………」

だが……対する玉藻は苦しそうな表情する

「…………リンク…………すみませんが 私は人間が嫌いです…………そして、
今のおなたも…………」

「…………ちょっと傷付いた」

「…………昔の貴方はそんな笑顔は見せなかつた…………貴方に無駄な
希望を与えたのは 仲間達ですね？」

「うん、無駄じゃないけどね…………もしかして そんなくだらない
理由でユウをこんなめにあわせたの？」

「…………ええ 私にとつてその子は邪魔ですから……」

「………… セウ」

シユツ ! !

玉藻の答えを聞いた瞬間 リンクは薄く笑うと一足飛びで玉藻との距離を詰め
ズバッ ! !

一瞬で札からコモクの剣を出し 横廻ぎに切り払った
「つーーー?」

だが 玉藻はこれを後ろに飛び、紙一重で躰す

「………… 猫又さんといい 不意打ちが好きみたいですね」

「………… ぶつちやけると人間はどうだつていいんだよね……復讐したい
なら勝手にやれ……だが、家族は違う」

リンクは、そういうと殺氣の含んだ目で玉藻を睨む

「………… フフ…… 良い目ですねえ…… ゾクゾクしちゃいます」

だが、玉藻はリンクの殺氣に平然としているばかりか逆に嬉しそうに、妖しく微笑む

「………… でも、まだですよ 貴方の本気はそんなもんぢやないはずで
す」

そつこつて玉藻は 手の平から炎の塊を出し、それをリンクに放つた

「ふつーーー」

リンクは、上半身を大きく「反らし」これを回避

「……まだまだ、いきますよー！」

しかし、玉藻は続けて炎を放つ

「ちいーー！」

リンクは、全速力で横に走り 木の影に飛び込み 隠れる

「……フフ……隠れても無駄ですよ……『炎帝・狐火！－！』」

玉藻の周りに火の玉が現れ狐の姿になった

「……行きなさい……獲物はあの木の影です」

玉藻が木に手を向けると、狐火達は一斉にリンクのいる木の影に突つ込んで行つた

「オオン！－！」

そして、大爆笑

リンクのいた場所に巨大な火柱が立ち上つた

「……終わりですね……案外呆氣ないものでした……まあ、人の命など憚……」

玉藻がそう言い掛けた。その時……

「ワアッ！－！」

突然、竜巻が立ち上ぼり、一瞬にして 炎を掻き消した

「キヤアツーーー？ な、何事ですかーーー？」

突然の突風に吹っ飛ばされだが、何とか木にしがみついた

「…………ふう」

竜巻がはれると、その中心には 剣を構えたリンクが立っていた

「……い、今のは何ですか？」

木にしがみついたままの 玉藻が驚愕の面持ちで尋ねた

「……大回転斬りだ……いや、竜巻回転斬りと命名しそう」

「…………た、竜巻つて…………」

「さて…………今度はこいつらの番だな」

リンクはまっとうこうと玉藻と同じように手から炎を出した

「…………？ リンク 貴方は炎術も使えるんですかーーー？」

リンクの力に玉藻は心底驚く

「…………何だかよくわからんが、くらえーーー！」

お返しとばかりに玉藻に炎を放つ

「くつ…… そんなもの効きません……」

思い切り木を蹴つて、その反動で炎を躰す

「そこだ！！」

リンクは着地の瞬間を狙つて 今度はさつきよりも靈力を込めて放つ

「甘いです！！」

しかし、それを読んでいた玉藻は 着地と同時にリンクの方向に炎を放つた

ドゥッ！！！

お互いの放つた炎と炎がぶつかり合い爆発、リンクと玉藻の間に立ち込めお互い前方の状況が分からなくなつた

（玉藻サイド）

……リンクの攻撃を防ぐためとはいえ これは少々ヤバいですね
これでは、前の状況が分かりません

それにこの煙のせいで周りの視界も奪われています

……さて、どうしたものか

それでも、炎術まで使うとは、ちょっとビックリです
靈力を炎に変える一族は滅んだはずですけど……

……まさか……

いえ……そんな事は後回しです
今は戦いに集中しないと…何をしてでも昔のリンクに戻つてもらわ
ないと……そして……私を……

ゾクッ！－

私が少し思案した瞬間 不意に背筋に冷たいものが走つた
……く、くる！－

ボワアツ！－

そう思つた瞬間 田の前の炎に一瞬円形の穴が開き 濃まじい速さ
の衝撃破が飛んできた

「がふつ！－？」

咄嗟に避けきれず 衝撃破は私のお腹に直撃、そのまま後ろに吹き
飛ばされ 木に叩きつけられ背中に鋭い痛みが走る

「うぐう！」

あ、……マズい……立ち上がれない

上体を起いとうとしただけで、お腹に鋭い痛みが走つた

「ぐつ！－……ううん！」

ダメです……手にも力が入りませんね……うう まさか
一撃でダウンなんてちょっと悔しい……
バシュウ

そういうしているうちに、目の前の炎が真つ一つ割れ、割れた炎は一気に焼き消えた
そして、その中心から冷たい目をしたリンクがゆっくりと歩いてきた

ゾクゾクッ！－！

その目に見られた瞬間　私の全身に電撃が走った

今、目の前にいるのは死神と同じ……それが、ゆっくり一歩、また一步と近づいてくる

それなのに、私は今　笑っていた

「…………死ぬのが嬉しい？」

私の目の前まで来て、私を見下ろしながらリンクが尋ねてくる

「…………はい、私はもう十分行きましたから…………それに　もう疲れました」

「…………疲れた？」

「…………はい、疎まれながら生きる事に疲れました……」

「…………」

「人間は　私の事を妖怪だといつだけで、化け物扱い　本当にバ
力な生き物ですね……」

「…………」

「人間達は　殺生石って呼んでもましたつけ？　あれで人間達が死ん

でいく姿は気分爽快でしたよ……」

「…………本当に?」

「はいっ! それからずっと眠つてたんですけどね あのバカな払い屋のせいで 起こらされるし また妖怪つて事で追い掛けてくるし もう最悪でした……」

「…………そう」

「つで その時に貴方に助けられたんですよ ウフフ…… 貴方に倒される払い屋……傑作でした……」

「…………そう」

「それから、邪魔だつたから 貴方の仲間を殺そうと……」

「…………そう」

「…………それから…………」

「…………私はもうすぐ愛する人に殺してもらえる…………それが私の望み…………嬉しい…………嬉しい筈なのに…………どうしてこんなに胸が痛むんでしよう…………」

「…………もう一度聞くよ 死ぬのが嬉しい?」

「…………はい」

「…………じゃあ その涙はなに?」

「つーー！」

私はリンクにそう言われて自分が泣いていることに気が付いた

「…………なんで？」

「もう 自分に嘘を吐くのはやめなよ」

「うそ？ 私が？」

「『めんね 気付いてあげられなくて……君が人を傷付けて喜ぶような奴じゃない事は、分かつてた筈なのに……』」

そういうつてリンクは本当に申し訳なさそうな表情になる

「本当にごめん 辛かつたな 淋しかつたな もう 大丈夫だから
…………もう 一人ぼっちにさせないから…………」

リンクはそういうと私の頭を優しく撫でた

私はその瞬間 自分の気持ちが抑えきれずにリンクに抱きついた

「…………もう嫌です！！私は何も悪い事なんかしていません！！それなのに、みんな…………みんな私を化け物だつて…………私は…………私は…………ただ 人から愛されたいだけなのに…………もう 一人ぼっちは嫌です

…………！」

止まらない…………抑えられない…………

私はリンクに胸の内を打ち明け そして子供の様に泣いてしまった

「大丈夫だよ」

リンクはもうこいつこつまでも 私の頭を優しく撫でてくれた

～玉藻サイドアウト～

「…………落ち着いた？」

「…………はい…………ですが、もう少しのままで…………」

玉藻はリンクに抱きついたままそう答えた

「んっ」

リンクもそのまま 玉藻の頭を優しく撫でる

「…………はあ 頭を撫でられるのって良いですねえ 癒になりそうですねえ（＊、＊、＊）」

玉藻はウシトリシしながらそんな事を語つ

「や、そう、それは 良かった」

「少し残念なのは まだ子供だとこいつとでじょうか…これが 大人だったらこのまま…………きゅう（ ）（ ）」

「…………」

大人だったらどうするのか聞こいつと思つたが 何だか聞いたらヤバ

そうだったのでもやめた

「ね、ねえ そろそろいいかな？」

そういうてリンクが離れようとすると

「ええ、あと5分」

「いや、それは寝起きの時のセリフで……」「

「むう 良いじゃですか……………いつ また いつできるか分から
らないんですから」

「これからはず」と繕つてゐんだから、

ワ、ワンモア……ワンモアプリーズ……」

え？ だからこれからはずっと一緒にだから……

スキエーン！！

卷之三

何処からともなく銃声が聞こえ、それと同時に玉藻は胸を抑えながら倒れた

「えつ！ ！ ちよつ！ ！ 大丈夫か！ ？」

リンクが慌てて駆け寄ろうとした時……

カバツ！！

ビクツ
!!

玉藻がいきなり起き上がつた

一
だ、
大丈夫?
……
」

リンクがピケピケしながら尋ねると

旦那様！！

卷之三

「今のは、間違いなく俺の嫁発言でしたよね！？」

「はつ！？ よ、嫁！？ えつと 嫁つて 結婚した時に言つ言葉
で 結婚ていうのは男女が家族になることで……俺は男……玉藻は
女……これからは家族同然…………つまり、玉藻は嫁？なのかな……」

「言いましたね！？ 今、嫁つて言いましたね！？ ううう……やつたあああ！！！ 旦那様、ゲットだぜーーーーー！」

リンクの答えはおおはしゃべる玉藻

「何かよく分からぬけど
あんなに喜んでるし まあ いつか
殺氣！――！」

ドオオーン！！！

リンクが凄まじい殺氣を感じ 喰嗟に横に転がると リンクのいた場所が爆発した

「……あら ごめんなさい 手が滑りました」

「デ、デルフ！？ つて 手が滑つたって何だよ……当たつたら死ぬぞ！？ あれ！？」

パチンツ！！

「フュイトちゃん アルフ

「つ！？ 何だこれ！？ 動けねえ！？」

「……バインドつて言つんだよ

「…とりあえず、一発……いや、十発 殴らせな

「何で増える！？ ていつか フュイト 何でこんなものを俺にかける！？」

「ふふ なんででしょうね？」

「クスクス 何でかな？」

「（ニヤリ） なんでだろうねえ？」

「ちよつちよつと待つて みんな！… 目が… 目が笑つてないよ！？」

「ごめんなさい… 何か分かんないけど ごめ… ギヤアアアアアス！…」

「されにされされされ」

番外編五 決着？（後書き）

次回は 温泉旅行

第十話 波乱の温泉旅行（前書き）

なのはの心境を書くのって意外に 難しい

第十話 波乱の温泉旅行

～コンクサイド～

さて、なんやかんや色々な事があつたが全て丸く收まり今、俺達は電車で旅館へと向つていた

「それにしても、動物も連れてきていいなんて 珍しい旅館だな」

「まあ 俺としては助かったけど」

確かに これで動物お断りだつたら…… ノウを隠さなきゃいけなかつた

「バッグの中は暑いんこや」

入つたことないから分からぬけど、猫がバッグから頭だけ出して

いる姿は中々萌えるものがある

「こしても 遅いねえ ここの乗り物 飛んだ方が早くないかい?」

「こじこじ、誰かに見られたらどうするんだ?」

「あたしとフロイトが そんなへマするわけないだろ?」

そうじつて腕を組んで指をトントン動かすアルフ

……結構イライラしてゐる今にも 飛び出しちやうだ…… しううがない

俺はアルフにそつと近づき小声で隣を見るように促した

「…………となり？………… フェイト？」

見ると フェイトは電車の窓から外を興味津々に眺めていた
多分 電車に乗るのは初めてなんだと思つ

「フェイトも 楽しそうなんだ 我慢してくれ」

電車の窓から知らない町並みを見る
旅行の楽しみの一つだ

「………… じつして見ると普通の女の子だねえ」

アルフはフェイトを愛しそうに見た

「………… アルフ………… 少し年寄りくせござわ」

「いわゆることよ――」

「グーはやめてほしこ――」

「ふああ………… 何だか眠たくにやつてきたにこにこ………… リンク………… 膝
借りるぞ」

そうこうでコウは 座つている俺の上に乗り、丸まつて寝てしまった

「うーーー?だ、田那様の上で寝るなんて………… 何でひざまけしか
らん事を……」

何か玉藻がめぢやへぢや「ひちを睨んでる
なんだ？

「「ひなつたら 私も子狐に変化して 旦那様の上に キヤア（
）」

一度玉藻を病院に連れていくつか本氣で悩んできた……

「……はあ 何だか暇ですね…… 音楽でもながしまじょつか」

「……他の乗客に迷惑だろ

「……誰もいませんよ？」

「えつー？」

「……うわて見れば 誰も乗つていない
貸し切り状態だ……

「……うわけで ながしますよ」

デルフはそういうと胸のポケットから携帯電話を出した

……ちよつとまてい！！

「お前 携帯電話なんていつの間に……」

「リンク 世の中には知らない方がいい事もあるんですよ？」

「……ういう意味だそれ！！

まさか 盗んできたのか！？」

「……リンク 人間というのは幻術にかかりやすいですね」

「今すぐ帰すか 自首して」「……」

「…………じゃあ ながしますね」

えつー？あれ！？ 「冗談じゃないの！？」

「ポチつとな？」

？？？

「デルフがボタンを押すと 携帯から軽快な音楽が流れだした
おお かつこいいな

？ワン トゥー スリー フォー ワン トゥー
ウル ラーセ ン？

ピッ？

「あつ！ ちょっと何で消すんですか？」

「当たり前だ！！ お前はこの小説を消す気が！？」

「…………むう ピッタリの曲だと思ったんですけど……」
「電車じゃなくて 車ならな！！」

全く なんて危ない奴なんだ

…………何だか 波乱の温泉旅行になる気がしてきた
～リンクサイドアウト～

なのはサイド～

今田はすずかちやんと下町ちやんと一緒に旅行なの 今、一緒に旅館に向かってこます

「温泉楽しみだね」

「ええ 何だか美容にもここらしこわよ」

アリサちやんもすずかちやんも楽しみにしてるみたい 私も楽しみ早くつかないかな

～なのはサイドアクト～

第十話 波乱の温泉旅行（後書き）

どうも バーダックです

ようやく 番外編も終わり 本編に戻れました

ふむ しかし、玉藻編の最後がいつもよりも再生数が多かつたのは
驚きました

まあ Gとの戦いの方が多かつたですが……

因みに 友達の話では 本編より番外編の方がまだ ましらじいです

ましつて何だよ！！

お世辞でもいいから 面白いっていつてよ！！

それから 本編の進みが遅すぎるとも言われました
申し訳ない…………ちまちまやつていこうかなあと思つてます
どうにも ストーリーの進ませ方がどへタでして……
はあ 文才と発想力と表現力が欲しい……

第十一話 再会

〔旅館内〕

「リンクサイド」

「海鳴旅館って言つてたな まあまあの所じゃないか」

「はいはい ピイピイ言つてないで荷物を部屋に運んで下さー」

「へーい」

「リンク 私達温泉に行つてきますねえ」

部屋に着くなりデルフ達女性陣は温泉に行つてしまつた

「さて じゃあ俺は少し散歩してくるか
ユウも行かない?」

「いや 俺は寝る

ユウはやつこつて座布団の上で丸まつた

(むう 僕一人か……)

少し淋しい気もするが とらあえずこの旅館内を見て回りつと俺は
部屋を出た

〔旅館内　温泉〕

「いやあ　温泉何て久しぶりです
フュイトちゃん達はどうですか?」

「…………温泉に入るの初めて……」

「何と!!　ではこれが初体験と言つ奴ですか

「すゞく　気持ちいい…………」
そつこつてフュイトちゃんは小さな笑みをうかべる

「はあ　確かに極楽だねえ」

アルフも頭にタオルを乗つけながら気持ちよさそうに口をつぶる

「アルフ　年寄りくさいですよ」

「んなつ!?.　デルフまで　私を年寄り扱いするんじゃないよ!..」

「あはは　冗談ですよ?」

「つたく…………」

…………それにしても…………

「んつ?..どうしたんだい?..デルフ　つていうか何処見て…………」

…………くつーーー何で大きさ!..

…………もにー

「うわ！？ ちょっと何処触つてんだい！」

「…………胸ですけど…………むむむ…………おつきくて、柔らかくて、形
もいいなんて……反則です！！」

神はなぜいつも違つ物を『』えるのか…………

「反則つて こんなもん大きくても邪魔なだけぞ」

「うう 私もそんな言葉を言つてみたい…………」

もみもみ

「つて いつまで触つてんかい！」

『ゴジン！－

「ギヤん！－」

グーはやめて…………

「二人とも あんまり暴れると他の人に迷惑だよ？」

「…………他の人つて、誰もいないじゃないか フヨイト」

「えつ？…………あれ？おかしいな…………
…………いつの間に出了たんだろ…………」

「…………？ でたも何も 最初から私達以外に誰もいなかつたじや
ないか…………」

「…………えつー…?」

アルフの言葉にフロイトちゃんはかなり驚いている　おやおやー
ーの反応もしかして……

「…………フロイトちゃん…………」

ビクッ

「な、なに?」

私はスッとフロイトちゃんに近付くと耳元で囁くと体をびくつかせた
声も少し震えている

「幽霊つて水場に集まりやすこつ知つてました?」

「ゆ、ゆうれい?…………」

私の言葉にフロイトちゃんの体が震えだした

「どうしたんですか?フロイトちゃん　身体…………震えてますよ?..」

「…………うう…………」

「幽霊つて　自分と波長が合う人にとり憑くらじこですよ?」

もしかして　フロイトちゃんが見えたのも…………」

「…………うう…………アルフ　デルフ　本当に見えなかつたの?」

フロイトちゃんは涙目になりながら、私とアルフを見た

…………ちよつとやりすぎました

「おい デルフ！！ フェイトを泣かすんじゃないよーー！」

「わあーー 待って待って 謝りますから拳骨はやめて！」

「フェイト 心配しなくても幽靈なんてこの世にいるわけないさ」

「大丈夫ですーー例え幽靈や妖怪に狙われても私達が守りますーー！」

「幽靈を否定しろーー！」

「ゴシンーー！」

「あべしーー！」

「ず、頭蓋が、頭蓋が陥没するーー！」

「…………本当に…………大丈夫？」

「…………フェイトちゃんはなおも涙目で聞いてくれるかわいいですねえ

「ええ 大丈夫ですーー！」

私が力強く言うと フェイトちゃんは安心したように笑った

「つたく 私はそろそろあがらせてもらひつよ

「？ まだ 体も洗つてないのに？」

「…………つ、浸かるだけで満足だよ…………」

そういうて アルフはそそくせと温泉から出よつとした

おやおや～ アルフったらもしかして……

「待つて アルフ」

もしか

「うわ！？ な、なんだい！？ って いつか 何で胸を触るー！」

今、私はアルフの後ろからおもいっきり胸を驚撃みにしていの
……くつ！！ 相変わらず何て弾力！！

「…………アルフ…………もしかして…………あなた…………怖いんですけど？」

「なつ！？？ そ、そんなわけないだろ！？」

「今ビビもつましたね？」

「ど、どもってなんかないよ…… いいから 話しなー！」

「ふふん 逃がしませんよ！」

もみもみもみ

「ちよひ ばか やめ あはは くすぐった や
やめ んつ あつ んん」
フー

「ひやつー み、耳に息を吹き掛けるな あつ ちよひ

ペロッ

「ひやわー?」

カプツ

「ひりー?」

…………母々 じぶんとこじですねえ
いつなつたら…………

私は此手をゆりへつておもひつた

「あ、待てーーー、あ、あーは…………せ、せぬ…………」

これでトヂメですーーー!

「あああーーー?」

バタツ

ついで アルフはその場に力なく倒れた

「はあ……はあ……はあ……デ、デルフ……」

アルフは倒れたまま私を睨んでくる

少し……やりすきました

「じや、じやあ 体を洗いましょうか…………フハイドをひいてから行きましたよ

「えつー？あつ うん」

フロイドちゃんは顔を真赤にしながら 温泉からでた…………フロイドちゃんには刺激が強かつたかしら？

「アルフー 立てますか？ 無理なら手を貸しますよ？」

「くつ デルフ 後で覚えてなよ」

「あ、あはは も、それにしてもやっぱり あそこが弱点だつたんですね」

「う、うわわわここよーーーいかい この事は誰にも言つてじやないよーーー！」

…………… 言わなくとも誰だつて知つてると思つますけどね 動物の弱点……………

～デルフサイドアウト～

～コンクサイド～

「ああ 気持ち良いく～」

旅館内を一通り見て回つた俺は 途中で発見したマッサージ機でくつろぎまくつっていた

ヤバイなこれ マジヤバイつて ビ�くらこヤバイかつてこいつとマ

ジヤバイ

ああ 何だか 眠くなってきたなあ
……こやいや ここで寝るわけには……寝るわけ……

「…………？」

～コンクサイドアウト～

～なのはサイド～

私は今、すずかちゃんとアリサちゃんの三人で探險をしています
結構広くて迷いそうなの

「せっかく 卓球台があるのにすずかもなのはもしないなんて……」

「じめんね アリサちゃん 私 そういうの苦手で……」

「こやは 私も苦手なの」

「だから 私が鍛えてやるって言つてたのに…………？」

「どうしたの? アリサちゃん」

「こや、あやこに座つて寝てる子…………寝てるの?」

「「え?」」

見るとい、もう動いていないこのマックサービス機に座つたままの子がいるの

「あんな所で寝たら風邪引っちゃうよ」

「つてこつか そのまま寝ひきこけないって貼り紙に書いてあるの
「こ

確かに マッサージ機の横には貼り紙がしてある
.....起にしてあげなこと

「ちよつと なのは どこ行くのよ」

「あの子 起にしてあげてくれる」

私はその子の元に駆け寄った

.....そして.....「あ」「驚きました?」

「.....コンクくん?」

～なのほサイドアウト～

早くもネタぎれ

第十一話 頑張れ

～コンクサイド～

俺は今 田の前の状況に困惑していた

「……………高町ちゃん?」

「……………リンク君?」

そう田の前に高町なのはがいる

あれ?おかしいな 何でここに高町なのはがいるんだ?

……………!」
「……………」
……………」
……………」

「リンク君?」

「えいっ?」

夢かどうかを確かめるため俺は 高町なのはの類を引っ張った「ふ
ええー? ふあひふうふうふおー? (なにするの)」

「……………いや 夢かどうかを確かめようと思つて

「何で 私のなのー?」

「いや 何となく……」

「何となくつて…………ひどいよ リンク君……」

「(あんな)い…………じゃ 俺は これで

俺は高町ちゃんに頭を下げ その場を離れようとしたが……

「待つて!! リンク君に聞きたいことがあるの…。」

手を捕まれ邪魔をされてしまった
ちい…! やはりきたか!!

「…………聞きたいことひとつのは あの黒い魔導師の事……ひとつしてあの子はジユエルシードを集めているの?」

「…………悪いな 僕もよく知らない…………」

「…………詳しく述べ……」

「えつ…? リンク君 あの子に協力してるんでしょ?」

「…………例え知っていたとしても 人の秘密を話すのは趣味じゃない

どうしても気になるなら 本人に聞いてくれ」

「…………」

俺の言葉に高町ちゃんは悲しそうに俯いてしまう

「…………逆に聞くが 何である子の事が気になるんだ?
あの子は 君の敵だろ?」

「…………何となく 何となくだけど あの子の事、とても悲しそうだった…………それに うまく言えないんだけど あの子の事 敵だとは思えないの」

「…………そつか…………それで高町ちゃんはどうしたいんだ?」

「…………私は…………あの子とお話したい…………お互この事…………もつとよく話しあえれば 分かりあえると思つた」

「…………すいこな

自分を攻撃してきた相手にたいして 分かりあいたいと思えるなんて、本当にすごい

「…………だつたら、挫けない様にな…………例えその子から何十回拒絶されても その気持ちを忘れるなよ…………」

俺は高町ちやんの頭を優しく撫でながらこうつた

「…………あ…………うん／＼／＼」

高町ちやんは少し照れ臭そつて手をつぶる

「頑張れ……高町ちやん」

「…………やつときから気がなつてたんだが、じつは…………高町ちやんの？…………前は…………なのほつて呼んでくれたのに…………」

「…………？…………別に呼び名なんつて何でもいいだろ？…………」

「じゃあ 私の事はなのほつて呼んで」

「だが断る…………」

「何で…………？」

「高町ちやんが フル…………あの魔導師と友達になつたら呼ぶよ」

「友達に？」

「ああ なりたいんだろ？」

「うん なりたい」

「うんうん 頑張れよ 応援してるぞ」

なでなで

「う、うん ありがとうのーーー」

「…………なんだか 良い雰囲気だね…………」

「ていうか なのは 私達のこと忘れてない？」

「…………何の話をしてるんだろ なのはちゃん 何だか嬉しそう」

「…………それよりも なのはに男の子の知り合いがいたなんて すずかしつてた？」

「ううん 知らない………… も、もしかして なのはちゃんのか、彼氏…かな」

「か、か、彼氏！？ な、何行ってるの 小学生で恋人なんて……」

「で、でも 頭を撫でられた時のなのはちゃん とっても幸せそう だつたよ

顔も 赤いし……」

「…………そういえば、学校でも ボーッとしてる時があるわね…………」

「…

「…うん む姉ちゃんもたまごボーッとしてる時があるよ…

「…でも なのはよ なのは あの純いなのはに彼氏向て信じり
れないわ」

「…でも、優しそうな子だよ…

「…すずか もしかして、ああいうのが好みなの?」

「ええ…! ち、違つた

「…魔の三角関係ね…

「ち、違つてばあ

原作の展開を忘れた

第十一話 ルルコム (前書き)

グダグダです
今に始まつた事じゃないか.....

「リンクサイド」

「リンク君 紹介するの
私の友達の……」

「アリサ・バーニングスよ」

「月村すずかです」

話を終えた後、俺はすぐにその場を去ろうとしたが、何か後ろの一
人が盛大に勘違いしていたので、とりあえずは「紹介すること」と
にした

「俺の名前はリンク ようしくね バーニングスちゃん 月村ちゃん」

「私の事は アリサでいいわ」

「私の事もすずかでいいよ 月村で呼ばれるのなれてないから」

「あ、うん わかった」

確かに 月村ちゃんはともかく バーニングスちゃんって呼ぶのは違
和感がある ていうか 噛みそう……

「………… ところで、あんたに聞きたいことがありんだけど……」

「……」

「……先に言つとくけど 高町ちゃんとは恋人同士でも何でもないからな」

「えつ？ そうなの？……ほら 見なさい すずかやつぱり あんたの勘違いよ」

……いやいや 勘違いも何も そんな要素ビームもなかつたら

「」やははは リンク君 友達だよ」

高町ちゃんも苦笑している

「でも 学校じゃ見かけない顔ね」

……マズい……

当然だが 僕は学校なんて行つてない
ここで 色々聞かれるのはマズい

仕方がない

「ああ エットと 僕は今 ここには住んでないからね……」

「……今つて事は 背は住んでたの？」

「うん 三年くらい前まではね
高町ちゃんとは 引つ越す前に公園で知り合つたんだ まあ 1週間くらい遊んだだけだけだよね」

当然これは嘘だ 確かに三年くらい前まではここに住んでいたが
今は違う

と言つても 町から森に移つただけなんだが……それにしても
よくもまあ これだけの嘘を平氣で吐けるもんだ……

自分自身が嫌になる…………でも、今はしょうがない 魔法の事
は当然秘密だらうし 昔の知り合いを装つた方が誤魔化しも聞く……と思つ

後は 高町ちやんに話を合わせてもらおう
そつ思つて 僕は高町ちやんの方を見た
……だが

「…………」

高町ちやんは 目を丸くして俺の顔をじっと見つめていた

……いや 嘘だからな

君まで 本氣にするなよ！？

「…………高町ちやん？どうかした？…………まさか！…………忘れて
しまつたのか！？ 僕達の出会いを！！」

俺はそつこつて ショックを受けたように大きく仰け反る
…………ちょっと大袈裟過ぎかな…………

「ふえ？ も、もちろん 覚えてるよ」

高町ちやんはそつこつて何度も頷く
良かつた 察してくれたか…………何か アリサちやんとすずかち
やんの視線が痛いけど…………

「…………何か怪しいわね」

「あ、怪しい？どこがかね？」

「…………何か 隠してない？」

「べ、別に」

くつ！！この二人結構鋭い！！

「 本 当 だ よ ア リ サ ち ゃ ん す ず か ち ゃ ん リ ン ク 君 と は 小 学 校 に あ が る 前 に お 友 達 に な つ た の 」

少し焦つていた俺をフォローしてくれる高町ちゃん
そして 意外と嘘が上手いな

「…………そう　なのはがそういうなら信じてあげるわ」

「ところで、リンク君も家族と温泉旅行なの？」

「うん デル…………えつと んひと…………お、お姉ちゃんが福引きで当たってね…………高町ちゃん達は？」

「私は家族全員であって すずかちゃんはお姉ちゃんヒメイーちゃん達
と來てるの」

はて、今 メイドと言つたか？

すすかちやんでもしかして お嬢様?
お嬢様 そして 高町ちゃん まさか

「ね、ねえ すずかちゃんの家って結構大きかつたりするの？」

「なによ、急に

「いや メイドがいるつて事は、もしかしてすずかちやんつてお嬢様なのかなあって思つたりしちゃつたり……」

ヤバい 動搖して変な口調になっちゃつたりして
「うん 大きいのかな? 多分」

「すずかちゃんの家 猫さんがたくさんいるんだよ」

はつあ!? ま、ま、間違いない あの家だ
「巨大子猫(?)がいた豪邸だ なんたる 偶然

「やうなんだあ お金持ちなんだね」

「..... そなのかな」

..... 何だか すずかちゃんの様子がおかしい
人のこと 言えないけど

「ちなみに 私の家もあんたの言つお金持ちよ..... まつ皿檻にはな
らないけどね」

そういうアリサちゃんの表情にもビック影がある
それと、言葉に刺がある

「..... ねえ リンク君

「これから私達 お土産を買いに行くんだけど一緒に行かない?」

「.....お土産?」

「うふ こい」

「こうして高町ちゃんは 僕の手をつかんで引っ張る

「ちよつ 高町ちゃん?」

「アリサちゃんもすずかちゃんも早く早く

「えつ~」
「さ

「ちゅうかりと 待ちなれること なのは」

有無を言わぬ高野けやんに俺はあわべなく連行された……

～リンクサイドアウト～

〔部屋内〕

「………… 遅い 一 体何をしてるんでしょうか リンクは」

「………… じゅうがに まじに 僕が探しに行くよ」

「いえいえ 私が探しに行きます（> - >）」

「………… じゃあ 私はジユエルシーを探しに行くね」

「まつて フロイトちゃん それは 夜に行きましたよ 今は
リンクを捜さなくぢや そして、伝えなくぢや ジユエルシー
が近くにある事を……」

「別に あいつがいなくても私とフロイトさんいれば問題ないわ」

「いえいえ それが問題あるんですよ そのジユエルなんとか 旦
那様がいないとひょっと回収するのが難しいです」

「…………」

「……ジユエルシードがある場所にちよつと厄介な奴等がいるんですね」

「厄介な奴等あ？ 誰がいるんだい？」

「…………天狗つていつちよつと厄介な妖怪です」

「ふん そんな奴等倒しちまえばいいじゃないか…………あの 白い奴も一緒に」

「…………」Jリは奴等の縄張りにや 好き勝手すると後で痛い田を見る「いや」

「なんだい びびつてんのかい？」

「…………一つ言つておく ジュエルシードを封印したらいすぐにその場からはにやれろ 天狗は特によそ者を嫌うにや」

コウは真剣な表情でフロイトとマルフに忠告する

「今回ま ジュエルシードの位置はほとんど特定されてる ん俺達は手出しあはしにや いにや」

「…………ふん 初めから私とフロイトだけで 十分だ」

アルフはやうにつて部屋を出よつとする

「アルフ ビー行くのー？」

「温泉」

アルフは、一軒のうちこつて部屋を出でて、

「はあ、やれやれにやせ」

「相あわらじ、仲がよろしくなこですね、貴方たはな」

「ダメだよ、ゴウさま、あんな事こかね」

「…………」ねんね、ゴウ

フロイドは謝りながら、ゴウの頭を撫でる

「…………」思はずしたが、後は勝手にやれいやせ

ゴウは、冷たくしゃうこひと丸まつて寝てしまつた

「ついしても、コンクは何處にいるんだしちゃ」

「…………やつまつとけいや、せつせ、あの高町にやんとかつて奴と一緒にこらんだだり」

「「今すぐここ、あのたらしを拉致つてしまふ……」」

ゴウの冗談に、デルフと玉藻は、一瞬のでいなくなつた

「…………娘、お前はこけにやじや」

「…………だめ…………かな」

「今、行って本当に高町とあつたらいが、わざわざ

まあ それでも俺は構わんが

「…………か、隠れて、とかはダメだよね？」

「…………お前は田立つだら

「…………ハハ

「まあ やれやれに セー 見つかってもしごこちや」

「…………こいつは 起き上がるヒュイトの肩に乗った

「…………えつ？」

「…………乗り心地は…………40度かにせん」

「あつ うん」

「…………乗り心地は…………40度かにせん」

採点が低い事に 何だか軽いショックを受けるが、 ヒュイトは
部屋のドアを開けた

「…………ああ イライラするねえ

温泉に向かっていたアルフは先程のコウとの会話を思い出してしながら
ぶつぶつと文句を言った

「…………危介な妖怪？痛い目を見る？ ふん どんな奴が来ようと
私のご主人様がまけるもんか」

超不機嫌オーラを出しながら廊下の真ん中を歩くアルフに他の人達
は全員道を開けていた

「…………ふん どいつもこいつも 根性がないねえ…………ん
？」

どこかのお偉いさんみたいになつてているアルフの前方に 四人の子
供達が話ながら歩いてくるのが見えた
リンク達である

（あれは確か この前の白い奴…………それに…………リンク！？）

「…………ん？ あつ」

アルフの存在にリンクも気付く

「…………」

「…………へえ 良い度胸してるじゃないのか」

アルフは不敵に笑いながらリンク達に近付いていった

第十二話 シリーズ（後書き）

基本的には極力原作のところはカットするか
オリジナル要素を強くするかのどちらかにします
……………というか 原作あんまり覚えてない

何かご指摘があれば遠慮なく言ってください

はあ 完結できるかな？

第十四話 フラケ乱立はいつか刺される（前書き）

進みが遅いです

第十四話 フラグ乱立はいつか刺される

～リンクサイド～

俺は今 高町ちゃん達と旅館の廊下を歩いていた
ちなみに、コーノも一緒

（酷いよ 僕がいなくとも話が進んでいくなんて……）

「めんコーノ

完全に忘れてた……作者が……

「まあ 元気出せつて……なつ？」

（うん ありがとう……）

ああ かなり落ち込んでいるな
こりゃ そつとしていたほうがいいかも……

とこりでコーノの声つて ビーかで聞いたことのあるみつな
ないような……

いや、それを言つたら 高町ちゃん達も同じか……みんな 良い
声してるよね

そんな事を考へていると 前から視線を感じた
見てみると 不機嫌オーラを出しているアルフがいた……アルフ
様がこっちを見ている
しかも、不敵に笑つてこっちに近付いてきた

「君かい うちの子をあれしてくれたのは」

「えつ？」

「ふーん あんまり賢そうでも強そうでもないし……ただのガキンチョにしか見えないねえ

…… その奴みたいに……」

いきなり、ボロクソに言われる高町ちゃん……そして最後に俺を一瞥つて 誰がガキンチヨだ こらあー！

俺は キツとアルフを睨むが軽く無視された
こんなにやうう

「…………なのは、知り合い？」

「ううん 知らない人」

「ちょっとあんた
いきなり失礼じやない」

そういうて高町ちゃんを庇うように前へでるアリサちゃん
うほ カッコいい

「おひさまは

悪い悪い 人違ひたつたよ

「酔つ払つてんのか?

お前も賢そうには見えないぞ」

גַּתְּתָה יְהוָה

ゴンシー！

「むぐあ……」

「超いてえ…… 我が頭部ダメージ40……！」

「てんめえ いきなり殴るか普通……！」

「ふん……ガキンチョが 生意氣^{いつんじや}ないよ……！」

「お前だつて 見た目そんなんでも 対して生きてないだろ」

……狼だし……

「あんたよりは 年上だよ ガキンチョ」

「また ガキンチョって言つた……！ あんまり人をバカにしてると

……」

「してると、なんだい？」

「その尻尾握るぞ（ボソ）」

「んなつ……？」

俺の言葉に少し顔を赤らめてたじろぐアルフ
ふふん やはり尻尾が弱点だつたか

「リンク あんたの知り合いなの？」

「えつ……？ あつ まあね」

「もしかして お姉ちゃんか誰か？」

「えつ…えつと そんなど…かな？」

しまった…！ ついいつもの調子で喋ってしまった…！

「ふーん お姉ちゃんねえ」

何かアルフがニヤニヤしてゐ

やめる その笑い方

そして、隣の高町ちゃんを見る

何だか 高町ちゃんの顔色が悪くなつていく

（おー！ 何を話してん！）

（！？ あんた 念話使えたのかい！？）

（いや これは神通力だ）

（じん……なんだつて？）

（神通力だ）

（それも 霊力つて奴かい？）

（まあね つで 何を話した）

（別に ただ 少し忠告しただけ… それと…）

（それと…）

(あなたが いひひ側だつて事も話しついたよ)

(…………なに？ おい どうこつ事だー？)

「じゃあ 私は失礼するよ じゃあね～？」

俺の言葉を無視して、その場を後にするアルフ

(あつ……いら まで……)

俺はアルフを追いかけようとしたが……隣にいる高町ちゃんの表情を見て諦めた

……そんな泣きそうな顔 するなよな……

今の中町ちゃんはとても不安そうで、今にも泣きだしそうだ
……魔法少女だつて言つても、元々は普通の女の子だもんな……

(…………一応言つとくけど フュイトを裏切つたら許さないよ)

そういうてアルフは一瞬二ひちを振り返り また 歩き出した

「何よ あの人 眞っから酔つ払つてんじやないの？」

「…………あ ごめんね
うちの姉が…………」

「べ、別にあんたが謝らなくともいいわよ

「なのははちゃん 大丈夫？」

「えつ？ う、うん 大丈夫だよ」

「じゃあ 気を取り直して お土産買いにいくか」

「そうね」

それから、俺たちはお土産を買いに行つた

……何だか 途中いくつもの視線を感じたが（殺氣含む）あれ
は何だつたんだろう……

第十五話 ジュエルシード 封印

「リンクサイド」

「けえつたぜ みんな！」

「誰もいない ちょっとさみしい

「みんな 出かけたのか？」

あれから 隨分たつ 流石に温泉には入つてないだろう。何に
しろ 一人じや暇だし……

「…………ねるか」

「…………永遠にね……」「

殺氣！――！

シユツ

ブンツ！――！

殺氣を感じ 咄嗟に頭を下げる瞬間 僕の頭上を何かが通過した
……も、物凄い早さだ 風が後から来た……

俺は急いで前転をし、距離をとつて後ろを振り返った

「…………デルフ？」

そこには 先頭にデルフ 少し離れた所に 玉藻、フェイト、そし

て 何故かフロイトの肩に乗つているコウがいた

「ちつ 外しましたか……」

デルフは、忌々しそうに言いながら、剣を鞘にしまつ……つて
ちよつと待て！

「剣！？ それ当たつたら即死じゃねえか！……」

「大丈夫 ちゃんと峰打ちですか？」

「一応言つとくけど それ峰ないからな……」

……刀じゃなくて 剣だし……

「いや それよりも こきなり不意打ちなんてビックリしちつもりだ！

？」

「可笑しな事を言つますね 不意打ちつていつのは いきなつやる
もんですよ？」

……そりや そりだ……じゃなくて……

「こわなつひとつもつだつて聞いてんのだよ……」

「自分の胸に聞きなさい……！」

「えー……？？」

「旦那様 あなたの罪を数えてください」

「えつ……ちよつと待つて……本当に訳が分からぬ……た、

助けて フロイト……」

俺はフュイトに助けを求めた……

トイツ

つが フュイトは拗ねたようにそっぽを向いた

……えつ？ 何で？ フュイトまで怒つてる？

何か少し頬を膨らませてるし……ふむ かわいい……つて

そんな場合じゃない……

「ユウ…… ユウ…… 助けて……」

今度はユウに助けを求める
「ふう……」

ユウはため息を吐くとフュイトの肩から飛び降り……そして……座布団の上で丸まつた……うそん

「時空の彼方に消え去りなさい……！」

「まつ…… ちよつと 待つて…… あつ…… 優しくして……
アツ……」

そして 俺の意識は途絶えた……

（リンクサイドアウト）

そんなこんなで夜

「じゃあ 行つてくるね」

「はあーい 行つてらっしゃーい」

「何かあれば助つ人に行きますから」

「……私はフェイトだけで十分だよ」

フェイト達はジュエルシードを回収するために旅館の裏山に向かつた

「大丈夫でしょ、うかうか……」

「忠告はした。後はあいつらで『ヤンとかするだらう』
「うんはっ！」（ ）！一瞬 花畠が見えた！』

「あら リンク 楽せよいじわこます……………いえ こんばんは
すかね」

えつ！？ もう夜！？

——はい（ ） さあ 田那様 一緒に温泉に入りましょう

「……………まだよ……………」と少しだけ泣き声でフロイドは泣きだす。

「ガーン！！」（；）

「フロイトちゃん達なら ジュエルシードを回収に行くましたよ」

「ジユエルシード!? あつたのか!? 」この辺りに

「……後厄介一ヤ事に その辺は天狗の縄張り一ヤ」

「…………マジですか？」

「マジですか？」

「…………ヤバくないか？」

「まあ 大丈夫だとは思つんですけど…………」

「…………一応 様子を見てくる……」

リンクはやつことと、外に飛び出した

「あつ……」「うーーー もつ セつかちですねえ」

「じつある？」

「私達も 行きましょ」「うーーー」

「もし 襲つてきたらその天狗共 狩つてもいいのかー」ヤフー.

「…………襲つてきたら……ね」

「…………」

「ニーヤー り 行くー」

「きまりですね ほら、何時迄も落ち込んでないで 行きますよ

「…………はあーこ（ 、 、 ）」

「！」の辺りに……

「しかし、なんだって あんたのお母さんはロストロギアなんて
ほしがるんだ？」

「…………分からないけど……母さんが 必要としてるなら 集めて
あげなくちゃ」

「…………なあ フェイト…………つー？…………誰だー！？」

アルフがフェイトに何かを聞いたとした時 不意に茂みの中から動
く物体を見つけた

「ああ フェイト アルフ 僕だよ 僕俺」

リンクが現れた

たたかう

痛め付ける

折る

「ちょっと 何このコマンド！―― ていうか 折るって何だー！」

「何だ あんたか………… 何か様かい？」

「いや 見に来ただけ（>・>）」

ズルツ

てつきり「手伝いに来た」 何で言つたと思ったアルフは リンク
の言葉にすつこけそつになつた

「帰れ！……」

「何だよ いいだろ？別に 邪魔はしないからわ」

「…………もしかして 心配してくれたの？」

「んな！？ にゃにをばかな！」

「…………嘘んだ……」

「…………へえ」

リンクの態度にアルフは悪戯っぽい笑みを浮かべる
「な、何だよ」

「いや 別に～」

「…………ああ もう いいから 早く封印して帰
るぞ」

一人の視線に耐えられなくなつたリンクは 照れ隠しに声を荒げる

「ふふ」

「あつははは」

そんなリンクに フェイトは小さく笑い アルフは爆笑した

「それじゃ、リンクもああ 言つてる事だし……」

「うん 封印するね」

フェイトは ジュエルシードを発動させ 完全に位置を特定した

ピクッ

「……………來たか……………」

ジュエルシードを発動させた瞬間 リンクはこちいらに近付いてくる
何かを察知した

「……………フェイト……………アルフ……………何だか大丈夫そうだから……………俺……………戾……………つてるな～」

「うん わかった～」

「……………それで、と」

リンクは フェイト達にそう告げると旅館とは逆方向に走つていった

第十五話 ジュノルシード 封印（後書き）

次回 リンク達VS天狗
ファイトVSなのは

一ノ

進みが遅くて申し訳ないです

アルフVSコ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5986v/>

魔法少女リリカルなのは 異能者達の伝説

2011年11月20日02時12分発行